# 淨土

## 新年號

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可
昭和十七年十二月廿日印刷納本・昭和十八年一月一日發行
（毎月一回一日發行）
第九卷　第一號

# 陸海軍病院 慰問淨土

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「淨土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘册の淨土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御參加をお願ひ致します。

## 白衣の勇士に法味を捧げよ

◇全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「淨土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。

◇一口一圓五十錢の淨財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ參ります。

◇毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。

◇個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。

◇御送金は淨土宗務所事變部宛に！　領收の證には宗報誌上及び「淨土」に御芳名を掲載します。

東京市芝區公園地　淨土宗務所　振替口座東京一番五一

知恩院門跡
浄土宗管長
増上寺主
法然上人

郁芳隨圓猊下
大島徹水臺下 序・増谷文雄著

新刊

# 行誡上人

稀代の善知識に私淑せよ

◇近世不世出の高僧、行誡上人の全傳成る◇

謹嚴にしてしかも脫俗洒々たる上人の風格は最大の魅力！上人の言行がそのまゝ信仰である。

學識に德行に一世に秀でた上人によつて、廢佛毀釋にあつた佛教界が指導された。更にまた上人の和歌、詩、書、畫はみな一流一家をなしてゐた。文の簡麗なる、筆の畝美なる他に求むべくもない。上人に傾倒する著者が渾身描き出した興味つきざる近來の名著。

言說・行業は直ちに讀者を感化せずにおかない！！

B6版二百三十頁
定價一圓五十錢
送料十二錢

## 內容


口繪・序文
一、學僧としての行誡上人
上人はかく學び給ふた・學問に於ける主張と業績
二、高德を偲びて
上人の風格のこと・芳躅をたどりて・遺書につきて
三、御一新の渦中に立ちて
廢佛毀釋の眞相につきて・肉食妻帶とたたかふ・毅然として識見を持す
四、上人の文藻に就きて
上人の短歌に就きて・上人の紀行につきて・上人の詩と書と畫につきて
附錄
著作解說
年譜



發行所 法然上人鑽仰會
振替東京八二一八七番
東京市芝區芝公園明照會館

# 淨土新年號目次


表紙・扉・目次カット……中島保

新春所感　挺身奉公の途……里見達雄…（四）

現代と淨土宗……佐藤春夫…（八）

初雪の朝……吉田絃二郎…（一四）

主婦は信仰の中心に……相馬黒光…（一〇）

隨筆雜話　記……子母澤寛…（一六）

元旦に念佛申して……佐藤賢順…（二三）

近藤裕子……大島徹水…（二三）

賞話靈守……石橋德作…（二六）

信仰の談……中村辨康…（四〇）

和歌　北海の皇軍を思ふ……岩野喜久代…（二五）

俳句　近詠……太田耳動子…（五〇）

隨筆　中將姫物語……高橋良和…（六〇）

童話　青い小鳥ときかん坊……小川金英…（四六）

歌壇……岩野喜久代選…（三五）

俳壇……太田耳動子選…（三三）

漫畫米英撃滅……漫畫協團…（四四）

物心二つの救ひ……（二〇）

地獄はあるか……（四七）

會のたより……（二七）

法語解說　日本人なればこそ……中村辨康…（五三）

編輯後記……（五七）

念佛のかずをおほく申すものを、自力をはげむといふ事、これ又ものもおほえずあさましきひが事也。ただ一念二念をとなふとも自力の心ならん人は、自力の念佛とすべし。千遍萬遍をとなふとも、百日千日よるひるはげみつとむとも、ひたへに願力をたのみ、他力をあふぎたらん人の念佛は、聲々念々しかしながら他力の念佛にてあるべし。

法然上人御法語

新春所感

# 挺身奉公の途

法然上人鑽仰會々長　里見達雄

大東亞戰よくぞ男に生れける——と現地の或る將軍が申しましたが、この感激は前線も銃後も均しく身にしみて感じてゐるところであります。もとより、大御稜威のしからしむるところでありますが、よくもこれ程の大戰果をあげ國威を宣揚したものであると感嘆し、それにつけてもわれわれ一億國民は更に舊に倍して和合協力し、それぞれのみちに御奉公いたさねばならぬと心に誓ふのであります。それと同時にわれわれの受持つ任務のますます重大であることを痛感いたすのであります。

淨土宗管長本會總裁郁芳隨圓猊下は先般文部省にて教宗派管長並に教團統理者協議會が開催されました際に畏くも、天皇陛下に拜謁の光榮を拜受いたし恐懼感激措く所を知らぬ次第であります。戰時下宗教の上に垂れさせ給ふ大御心の程を拜察し奉りますと、いよいよ宗教報國の決意を新にし匪躬の誠を致し以て宏大無邊の聖恩に對し奉らねばならぬと存ずるのであります。

戰時下にあつて先づ國民精神の昂揚が最も大切であります。第一年目はあのやうに勝つて勝つて勝ち拔きました。その結果、昔なら地球のはてのやうに思はれてゐた濠洲の東端や印度洋の西端にまで皇軍の武勳が赫々とかがやいてゐるのであります。このやうにして第二年目を勝ち拔かねばなりません。いや何年さきまで飽くまで勝ち拔いてゆくのであります。申すまでもなく今や世界は米英の非道に屈服してしまふか、又はわが國の正義によつて最善のものとなるか二つの内の何れしか途がないのであります。從つて萬一にもわれわれが勝ち拔かず世界を正義に導き得ぬこと

でもあれば、われわれは根こそぎ滅ぼされるのであります。この判り切つた事柄が、即ち正義のために辛苦に耐へて勝ち拔くといふ決意が、若し國民精神に遲緩が見られるやうでは出來得ないのであります。而してまたこの國民精神を昂揚せしめることこそ宗教家本來の使命であつて、これが具現に努力することはわれわれの重大な責務であります。

また近代戰に於ける思想戰が重要なことは申すまでもないことであります。この思想戰では第一に個人主義的なもの功利的な思想を排除しなくてはなりません。ごく一部の人の間には今になつてなほ、戰爭を忘れてゐるか忘れずともなるべく戰爭から離れよう、遠ざからうとしてゐる者がないと云へません。かゝる者が例へ一人でも二人でもゐることは重大問題であります。今まで戰場が常に遠い所であり、空襲らしい空襲すら受けたことがないため、皇軍が如何に辛苦をなめて鬼畜の彼等を殲滅してゐるかを知らぬ人があるためであります。思想戰の敵は外部ばかりでなく國民の内部に巣喰つてゐて目には見へぬものがあることに注意しなくてはなりません。更に思想戰に勝つといふことは敵を追拂ふばかりでなく、わが國の正義、聖戰の目的を世界いたる所に、特に敵國の中にまで滲透せしめることであります。わが國の正義に對して敵國その他の國々に理解させ、心服させ、歸依させることであります。かつては不幸にして米英の思想が世界を風靡したかに見えた時代がありました。よつてこの敵國思想を打ち破り、新しくわが國の正義を世界いたるところに樹ち立てることが思想戰の目標であります。

## 近詠

太田耳動子

石段を見あげ見おろし人の秋
法堂の秋に參じて烏かな
柿くうて柿もぎ晝餉としたりけり
かへりざき眞盛りなる櫻かな

身邊些事　三句

火鉢前に機械の調はかりゐる
くろがねに油に蜻蛉うみつくる
冬空の斷崖つくり輕氣球

これまでわれわれは勤勞奉仕に、軍人援護に、或ひは滿洲支那にあつては宣撫活動に文化工作に微力ながら努力してきました。しかし今後は更に大東亞建設の一環としても宗教が重要なものであると自覺してゐます。即ち南方諸地域と協力して教化の使命遂行に邁進しなくてはならぬのであります。南方の諸地域は宗教を拔きにして考へられぬことが多々あります。大東亞建設の一環として宗教的融和をはかり宗教を通して互に理解を深め相提携してゆくといふ宗教工作が大切なのであります。

事態はまさに一刻の偷安を貪ることを許さぬものがあります。われわれは菲才を省みるいとまなく各自陣頭にたつて働かねばなりません。このことはつまり率先垂範、實踐躬行であります。これがために日日己れの修養を怠つてはなりません。尊き使命に發奮し、自ら持すること嚴に、自ら修する所深く、そして自分の身體を以て衆に示すの覺悟がなくてはなりません。

自分のなしてゐる行爲が何んなことであるかよく判つてゐない人を見受けることがあります。例へば物資が不足すれば少し位は物價が上つても當然であると不正な價格を見逃したり、收入の多くなつた者が餘分に金を消費しても仕

## 廢物利用（火の元家庭で造る方法）

◉**ヒノモト附木**……お國の重大事に際して私達銃後の者はたとへ一錢でも無駄に出來ません。それについて**マツチ**の節約を思ひ立ちました。何んでもない樣ですが毎日の必須品ですから積ると大したものです。次の作り方をば利用と同時に一人でも多く、一日でも早く他の方々におすゝめ下さつて國家の爲廢物利用節約の實を上げられん事を願ひます。

◉**造り方**……硫黃華を藥局で五錢位買ます（五錢の量で一軒の家なら三、四年もの分が出來ます。）茶碗でも皿でも金物でもよろしいから約一錢位の量を入れて水を入れないで、そのまゝぬるい火にかけると溶解しますから、其の中へ切つたものゝ先を少しつけるとそれで立派な附木が出來ます。（硫黃華は餘り澤山つけない方がよろしい）器の中の餘りの硫黃華はさましてをくと固くなりますから、又使用の際はそのまゝ火にかけて下さい。

◉**材料**……**マツチ**の一度使用後の軸木、又折箱の古、古ハガキ及びボール紙を細く切つたもの、木の葉等々一本づゝ硫黃華を付けると暇が入りますから一度に先を揃へて付けて下されば時間の經濟です。

◉**使用法**……火に硫黃華の付いてある先を付けると直ぐもへついて**マツチ**三、四本も入る樣な火の付き惡い物でもタツタ一ツで樂々と火が付きます。

◉**質問先**　大阪府北河內郡庭窪村八雲　來稱寺中　松本孝道

方があるまい等と考へる者があつたら、それが如何に重大な過失を犯してゐるか判らぬ人なのであります。又かゝる誤つた暮し方をしてゐる者を是正してゆくには矢張り信仰の力を待たねばならぬものであります。口にお念佛を唱へながら、若しお國のために十分盡しきつてゐないとか、少しでも惡いことをする等は、したくも出來ないといふことにならなくてはなりません。

生易しいことでこの長期戰を最後まで勝ち拔くことが出來るわけもなし、一生一代これ程光榮ある大事業はありません。われわれは聖德太子の示されたお言葉、「人はなはだ惡しきものすくなし、能く教ふれば之に從ふ……それ三寶に歸せずんば何を以て枉れるを直くせん」によつて生活の規準としてゐるのであります。

淨土宗でも戰時生活强化のためにあらゆる機關を動員して努力いたす決心でゐます。

國民生活の確保を期し、勤勞精神を昂揚して生產力の增强を計り、そして必勝體制を完備することこそ最緊要のことであります。われわれは一億一體一心となつて挺身奉公をいたすべく特にこの新春に際して決意を新にいたしてゐる次第であります。

## 陸海軍病院慰問「淨土」寄附者芳名（敬稱略）

五　圓　東京市芝區松本町十一　村田嘉久子
十　圓　東京市本郷區弓町二ノ二三　木下利吉
一圓五十錢　郡山市稻荷町十八　溝井顧治
五十四圓　天津日本租界明石街　天津寺信徒有志

內譯○一圓五十錢、天津特一區、瀨戸夫人○同、天津日本租界松島街、富木ハル○同、同日本租界西宮島街、森川きん子○同、同華街、荒牧かめ○同、同日本租界松島街、牛島のぶ○同、同特別三區、吉野とし子○同、同日本租界淡路街、樋口せき○同、同同淡路街、深谷ふじ○同、同同福島街、三文字司也子○同、同同伏見街、小橋貞枝○同、同佛租界五十八號路、前川かつ○同、同日本租界旭街、蝦名すゞ○同、同同蓬萊街、淡谷まさ○同、同同須磨街、長谷川ひの○同、同同旭街、塚本ハツエ○同、同同西宮島街、奧山とき○同、同同常盤街、相間ユキ○同、同同福島街、三上美惠子○同、同華街、織田氏○同、同日本租界天津別院、安部觀道○三圓、同同住吉街、鹽塚夫人○十五圓、同同須磨街、佐藤峰雄○三圓同同伏見街、伊藤トシエ○一圓五十錢、同同天津別院、瀧澤孝道（以下一七頁に掲載）

# 現代と淨土宗

佐藤春夫

## ……現代と宗教……

現代は科學の時代であるといふ。それは已にその通りである。だから宗教などは不必要であるかの如く說く者があつたら、大間違ひであらう。科學には科學の領域があつて、宗教は科學の支配する世界ではないからである。科學が兜を脫いだところから宗教がはじまるからである。科學は人間の生理と病理とを支配してはゐるが靈魂は支配してゐないからである。心臟や神經の作用についてはよく說明する科學も靈魂といふものの存在は全く知らない。さうしてそれ故に科學は靈魂を無しと斷定する。何でも知らないものは無いとうぬぼれてゐる人間が、自分の知らないものを無いときめてかかつてしまふたぐひである。この種の心驕りの極みに對した者に對しては宗教は全く緣なき衆生として度し難きを歎ずるのみである。全く「おろかなる者は世に神なしと言へり」とバイブルにあるのも、この同じ意味であらう。宗教は人間の理智の無力で賴むに足らぬことを知るところから發足するのである。この困惑を經驗しない人間は大馬鹿である。さうして大馬鹿の欲しがるものは金や名譽や世俗の幸福だけである。それで氣のすむ人にはなるほど宗教の必要はあるまい。世は科學の時代ではあらう。然し科學の時代だといふことが、大馬鹿の時代といふ事と同じ意味であらうと自分は思はない。否、科學の時代とは人間が智慧を尊重する時代といふ意味で

あらう。さうでなければならないと自分は思ふ。智慧は成長する。成長した智慧は自然界の大法則を學びこれを尊重するであらう。科學は目に見える自然界の法則を學びこれを尊重する精神が我々の所謂宗教である。我々の宗教と科學との相違は目に見える自然界のみを世界とするか、目に見えぬところにも世界があると感じるかだけの相違である。科學者が肉眼で見えない世界を科學的な器械の目で見て別世界を持つが如く、すぐれた信仰の士は俗眼でも器械の眼でも見ることの出來ない精確な心の眼を以て心の世界を見てその大法則に驚き畏敬を感ずるであらう。これが我々のいふ宗教なのである。

## ……現代と淨土宗……

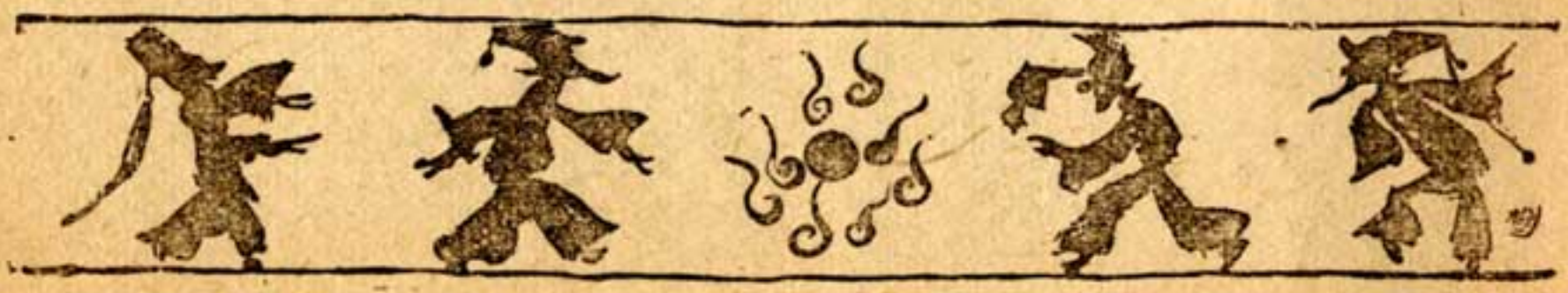
一切を阿彌陀佛に歸一して、その絶對の力に樂しみ喜んで服從しようとする淨土宗の教へは、天皇に歸一し奉らうと身命を捧げてゐる日本人にとつては、不思議と互に似た信仰に感ぜられるに相違ない。格別の不思議はない。思ふに法然上人は我が國體の認識を深くして佛教のなかにこの國體の認識を織り込んで置かれたからである。この意味で淨土教こそ最も日本的な宗教と言ひ得る。

自分はこの間古賀の近村に「日本の母」を訪問して、一家の愛國の熱情と捧仕の生活とに感動して、この家族は必ず信仰の力に生きてゐるであらうと感じたから、これを聞いてみたら代々淨土宗の家であるといふ答であつた。自分はなるほどと感じて、一切が明瞭になつたのをおぼえた。

現代が科學の時代である事だけを知つて、我々の愛國精神の影に古來の日本的宗教が脈々と現代に生きてゐることを知らないのは、迂愚も亦、甚しい論である。

あらゆる宗教をして迷信たらしめるな。あらゆる宗教をして日本の國柄と國土とに適合せしめよ。

これが現代の宗教家にとつての唯一の急務であらう。また、かういふ宗教家を活動せしめる事が現代の爲政者の智慧でなければなるまい。



# 主婦は信仰の中心に

――私の歩んだ入信の道――

相馬黒光

十年戦争が五十年戦争になつても、最後の勝利を得るまでは飽くまで戦ひ抜くといふ長期戦のため、只今は一人一人が一歩一歩とゆるみなく突き進まねばならぬ時であります。このやうな時に當つて何やかやと論議してゐる場合でなく唯各人がそれぞれの信念の上にたち、その場その場でやり抜く以外に方法がないのであります。しかるに私の如きは長らく病床にあつて勤勞奉仕一つさせて頂くことが出來ないのであります。といつてこうして生きてゐる以上は、只靜かにねてゐれば好いといふものでなく、矢張り床の上にでもしなければならぬ仕事がある筈であります。それならその仕事は何んであるか、病人は病人としてこの時代に何う生き抜いたらよいのか、こう私は毎日考へてゐる次第です。

老齢で病床にある私ですが、さりとてこれで隠居するとか家事を一切若いものに委せきりにする考へは少しもありません。今でも私は當家の主婦であり、主婦として一家の中心としての役目を果したいと思つてゐます。身體を起すことは勿論のこと、手一つ動かせない現情ですが、主婦はその家の信仰の中心となるべきであつて信仰上のいろいろの行事はすべて主婦に課せられた仕事であると信じてゐますので、私はせめて信仰の上に生き抜いてゆきたいと思つてゐます。佛教についてはほんとの素人であつて、佛教徒であると名乘る程のことはありませんが、それでも念佛を申し阿彌陀佛に歸依してゐる以上は、この信念の上にたつて生き抜く以外には途がないとつくづく感じてゐるのです。

しかしいかに主婦として一家の信仰の中心になる心算でも、主婦の信仰一つでその家の者全部が同じ信仰に生きてもらはるかといへば決してさうは簡單にゆきません。私の祖父は漢學者であつたので祖先の靈を粗末にするやうなことはありませんでした。一室に祖先をまつつた所があり、年一度お祭りしたり、その部屋に子供の出入するのを禁止し、御祠堂と稱して神聖な場所になつてゐました。尤も正月になるとお寺の住職が年始に來たし、

私達もお寺に墓詣りに行つたものです。だが私にはただこれだけでは心の奥で求めてゐるものを満足させてくれませんでした。

その頃家の近くに基督教の教會が出來たので、私はその日曜學校に通ひ始め基督教の說教を聽くことになりました。こうして基督教の門をくぐつた私は隨分あちこちに說教を聽きにゆき、當時の錚々たる第一人者の說教も幾度となくききました。それでも尙私は自分の魂を滿足させることが出來なかつたことを憶へてゐます。ただその中でニコライ堂に行つた時、實に立派なコーラス團があつて長い儀式とそのコーラスが何かなし嚴肅な氣分を與へ自然と頭のさがる氣がしました。ニコライ堂には日曜の度に詣つてゐました。

こうしてしきりと求める自分の信仰心にさして滿足を與へることが出來ず、基督教とはいつか離れてゆきました。自分で自分の魂のおき場所に迷つてゐた形でゐるままに、私は結婚して信州に住むことになりました。信州は御承知の通り廢佛毀釋の劇しかつた所で相馬家の佛檀にしても實にお粗末なものでした。五年間信州に暮してから東京に出てきてパン屋を始めました。私が佛教と緣が結ばれるやうになつたのは、娘の葬儀の日に渡邊海旭先生が來て下されたのに始まります。國志的な渡邊先生は以前からボースとは交友の仲であつたので、娘の葬儀には丁度同じ時刻の日に芝中學校の方でも重要な會議が開かれることになつてゐたにも拘らず、會議を延期してまで、わざわざ來て導師を勤めて下されました。

私は通夜の枕經をあげて下された青柳貫孝師から渡邊先生が增上寺日曜講演で御講筵中だと教へられてゐたので、次の日曜に早速增上寺に詣つて渡邊先生のお話を聽きました。私が渡邊先生の聲貌に接し得たのはこの時が初めてゞした。先生のお話を聞いた時の感動は今以て忘れることの出來ないものであります。その時までウロウロと迷つてゐた私の魂がピタリと一所に止まりました。求めて得られず闇く閉ざされた求道の扉が一時に大きな力で思ひきり廣く打ち開かれた思ひでありました。私はこの時からまつしぐらに佛道を突進して行つたのです。思へば私の魂が安住所を得るのに隨分と廻り道をしたものでした。すぐ目の前に淨土といふ白道が横はつてゐたものを、全くそれと氣がつかずにあちらに馳しり、こちらに迷つて彷徨してゐたのです。私はそれから增上寺の日曜講演に通つて、漸次開けゆく光明の世界をみつめながら一心に進んでゆきました。

こうして私はやつとのことで自分の進むべき道、魂の安住すべき場所をさがし得た喜びでやれ嬉しやと思ふ間もなく、肝心要の渡邊先生の御西遷に逢つてしまひました。それまで無我夢中で乳房にとりついてゐた赤坊が突然母親に死なれて闇黑の谷につき落されたやうなものでした。自分の力ではこの先き何うしたらよいか一向に見當すらつかず、止むなく女のお弟子さん達と一緒に、渡邊先生の命日に集つてはお勤めをして僅かに先生をしのんでゐるばかりでした。その內にいつも集

まる人達から、これは何うしても先生の後を繼いでわれわれを導いて下さる先生をお願ひしないことには自分たちの力でこの先の精進も覺束ないからといふことになつて、先生が生前から「極く親しくしてをられた大島徹水師にお願ひしたいといふことに相談が決まりました。

そこで私が皆を代表して大島師を京都家政高等女學校にお訪ねし、是非ともわれわれをお導き下さるやう懇願したところ、大島師は快よく承諾され、東京に來られた時には必ずわれわれに會つて下さると約束されました。その後大島師は增上寺の法主になられ、今もつて引續きわれわれは大島師から懇切な指導を頂いてゐるわけであります。

思ふに若い頃から求めてきた心の方向、迷ふ魂の安住所は決して理論によつて解決のつくものでなかつたのでした。著名な方々の說教や講演は幾度も聽いてゐながら、迷ひ拔いた私の魂は矢張り法然上人の御信念にたちもどらなくては救はれなかつたのです。宗祖上人が御自分では一切藏經を前後八回も披覽せられ「智慧第一の法然房」といはれながら實に三十五年の長きに亙つて苦しまれ、しかも「この三學のほかにわが心に相應する法門ありや。わが身に堪へたる修行やある」と問えられた結果、遂に念佛一門の道を開かれたのですから、とるに足らぬ私如き一凡婦の救はれる道はお念佛より外にあらう道理がなかつたのです。阿彌陀さまのお光りに照されて初めて大慈悲によらなくては信念を固めてゆくことが出來ぬと悟りました。

私は店を經營して來ましたが遂に素人の域を脫し得ませんでした。また妻としても良妻たり得ず、母としても慈母たり得ず、主婦としても役目を果し得たとは思つてゐません。さうかといつて念佛婆にもなり切つてゐません。かういふ自分を、どう處理してよいのでせうか。

私はこのありのまゝを彌陀の御手にお任せするより外に道がないのであります。六十七歲の病軀を横へて何時お召しにあづかるか判らぬ只今、誰もが云ふことでありながらつくづく因緣の不可思議さについて痛切に感じてゐる次第です。因緣とはまるで自分のための言葉ででもあるかのやうに思ふ位です。

さて、女は何んといつても主婦たる役目が一番重要であります。そしてこの主婦はしつかりした信仰をもつてゐて、その家の信仰的中心の役目を果すことこそ大切であります。主人や子供の世話ばかりでなく祖先を立派にまつり、自らは佛敎に篤く歸依してその信仰を毎日の生活の内に織り込んでゆく以外に、家をよくし社會をよくしてゆくことは出來ません。尤も主婦が信仰心に篤ければ、すぐ家族や使用人が同じ信仰に進んでくれるといふわけにはゆきますまい。主人や子供が主婦の信仰にすぐついて來ない方が有り勝ちなわけで、こうして自分と歩調を合せてくれぬからといつて苦にやんだり、これは駄目であると途中で諦めたりしてはいけません。

それには先づ佛檀を立派にして家の中でも一番大切な所に安置します。何も佛檀の大小

や金箔の多寡をいふわけでなく、自分の眞心をこめてお守りをすれば自づと佛檀は立派になります。毎日一定の時間に佛檀に向つて禮拜をすることが實は總ての行ひのもととなるのです。佛教に歸依し、目標を定めてそれに向つて日日を暮せば先づ家がよくなり從つて社會がよくなります。

私の如きは佛教の概念一つ判らぬものに過ぎないながら、こうして何十年に亙つてパンや菓子を作つてゐるのも一つの信念の下にやつてゐることなのです。即ちこうして商賣をし生活してゆくこと自身が私の信念の現れなのです。佛教に歸依するのに商賣を捨てたりする必要はないと思つてゐます。

少女の頃には人を避けて山に入り、林の中に伽庵をきづいて心ゆくばかりの暮しがしたいと思つたことがあり、その後も長くこうした生活に憧れてゐました。しかし、渡邊先生の御教をうけてからは、自分の暮しの中に信念を持つことこそほんとの道であると判りました。何かことをなすのには、もとよりよく考へた上でのことですが、一度意を決し、自信を得れば何の顧慮するところなく始めます。そして、若し間違つてゐたことが判れば直ちに止めて、新しく方向を變へて、また出直します。

實は一昨年のこと私は一度息を引取りました。その時馳けつけて下さつた大島師の御十念によつて不思議にも息をふき返したのです。ですから私はすでに一度死んだことがあるわけで、今尚風前の灯のやうな生命をながらへてゐますが、一生涯を通じて私はたたかれ、前倒されてきました。私はこうした中にあつて非常な幸福を感じてゐます。少女の頃から周圍の者からよく守られ、長じては常によい先輩あり、先達ありで、これに優る幸福は他にあるまいと思つてゐます。年齢や學識や名譽の點で先輩である人だけが私の先輩ではありませんでした。例へ不心得な人があつて何か間違つたことをした者であつても、私にとつてはこの上ない教訓を與へられてゐるわけであります。總ての人、すべての事物自然界の一切から云ひしれぬ惠みが與へられてきたと感じてゐます。

日日に身の周りにおきるいろいろの事の中には自分にとつて都合のよいことばかりあるわけもありません。そしてその時々には苦しんだり腹がたつたり、或ひは困り切る場合もあるけれど、ものの考へ樣によつてそれは何れも自分を守り教へてくれるものとならぬものはありません。私の如き凡俗な人間は自然界について詩を談り歌ふ術を知らないけれど青空を眺め鳥をみ風の音を聞いて山川草木に云ひしれぬ美しさは感じられます。又自分の郷里とは數十年交渉をたち、ただ仕事に齷齪して來ましたが老境に入り何かにつけて自分を培つてくれた郷里の恩をも有難く感謝し、美しい故郷を懐しむことは出來ます。現在の私をこの上なく幸福な女だと思つてゐます。しかし考へてみると自分の幸福は私の力によつて出來たものでなく阿彌陀さまのお力によるものと信じてゐます。

（寫眞は筆者、相馬黑光女史）

# 初雪の朝

吉田絃二郎

初雪が降つて來た。

子供のころ初雪が降つて來ると庭にをどり出て、兩手を擧げて、初雪を迎へたことを思ひ出す。

春の夏に移り、夏の秋にかはりゆくことには特に目立つ變化といふものはないが、冬の訪れだけは雪を伴うてゐるので、はつきりした印象をわたくしたちの心に刻みつける。

高い山では九月になれば初雪が降り、やがて十月、十一月と雪は里近くの山々に降つて來る。

はろはろの山の雪をながめつゝわたくしたちは日一日と近づく冬を身に感じる。

夢の多い子供たちにとつて山の雪はまだ見ぬ世界の夢であり、聖なるあこがれであつた。

この子供のころの聯想は、現在のわたくしたちのところにもまだそのまゝに生きてゐる。

平常は齷齪として俗念に追はれてゐるわたくしたちも、山々に迫つて來た初雪を見れば、尊い子供時代の淨い心を取りもどす。佛さまの御心といふのはあれであらう。

山の雪をながめて昔の子供心を取りもどすことのできないほど、人間の心は俗化することはできない。

だから幾歳になつても初雪といふものは何となく嬉しいものである。

今朝は一時間ばかりで雪は止んだ。庭の落ち葉の上や池の周圍の苔の上に消えがてに殘つてゐる初雪をながめてゐると、今年も一人生きて初雪を拜むことのできるありがたさをしみじみと思ふのであつた。

冬は寒い。凌ぎがたい夜がつゞくであらう。けれど

も冬ほど心靜かに物思ふことのできる季節はない。春夏秋が活動の季節であるとすれば冬の夜こそ思惟の夜である。窓を閉ぢ、たゞひとり悠久について、人生について、三界について思惟すべき時である。

熱田島、鳴神島、北方の戰線に日夜をかけて、祖國を守つてゐる人々のことを考ゆれば冬の寒さはものゝ數でもない。吹雪の夜も空を守る看視哨の人たちは家を忘れ、身を忘れて大空を見つめてゐることであらう。

或はソロモン海をはじめ南方の戰線に晝夜を分たず血戰をくりかへしてゐるであらう人々の勞苦を想へば、冬の夜の炭火を見守りつゝ靜かに生きてゐることのありがたさを感謝すべき言葉もない。

靜かな冬の夜である。

たゞひとり生きてあることのありがたさを思ひつつ、われ等のために戰ひつゝある勇士たちの上に思ひを走すれば、冬の夜はひとしほ尊い。

×

初雪の朝英靈はわたくしたちの町へ還つて來た。町の人々は道に堵列して英靈を迎へた。

かつて雪の朝鎭守の森に集まつて若い勇士を戰線に送つたわたくしたちは、ふたゝび雪の朝同じ勇士を英靈として迎へた。十九歲の勇士であつたが。

あの雪の朝の若い勇士の凜たる風貌を描きつゝわたくしたちは道ばたに佇んでゐた。

白い布につゝまれた勇士の形見は靜々として戰友の胸に抱かれて、故鄕に還つて來た。

迎へる人々はたゞ默々として迎へ、寂として聲もない。尊いかな初雪の朝。

今は日本中、到る處に若き英靈たちの凱旋を見ることであらう。

わたくしたちの胸は疼く。しかし一切を忍んで戰はなければならぬ。

わたくしたちは日本の歷史はじまつて以來の大きな時代に生まれ合せたことを思はなければならぬ。「御民われ」とうたつた萬葉時代の人に比べてさらに幾百千倍の大いなる時代に生きてゐることを思はなければならぬ。

初雪の道を踏んで町の國民學校の少年たちは、その母校の先輩たる若い勇士の英靈を迎へてゐた。

今日の少年たちも亦やがては先輩たる英靈の後を繼いで戰線に走るであらう。

大いなる朝よ。子供等は林檎のごとき紅い頰をして、殊勝げに頭を下げて行き過ぐる英靈を拜んだ。

×

初雪の朝わたくしは多摩の川原に出て見た。秩父も丹澤も大山も眞白であつた。

收穫もすんだ田圃には人影とてもなかつた。不圖わたくしは白鷺や雉子鳩の田圃から川原にかけて餌をあさり、飛び下り、飛び立つのを見た。とりわけ富士を遠くながめつゝ悠揚迫らず飛んでゐる白鷺の姿は強くわたくしの心を惹きつけた。大戰のさなかにこの靜かな國のありがたい眞姿を見るやうな氣がして、碧い大空を翔ける白鷺を飽かず眺めてゐた。

初雪の多摩の川原に群れ立てる
白鷺をみれば尊くもあるかな

×

昨夜は夜つぴて凩の聲がものすごいほどに家の周圍を荒れまはつてゐた。あたかも遠い沖のあらしを聽くやうであつた。恐ろしい凩の聲と寒さにおびえてか犬が鳴いて仕方がないので、犬小屋を覗いて見ると小さくなつて奥の方へうづくまつてゐたので、裏の物置から藁を運んで入れてやつたらおとなしく寢ついた。

今朝は家のまはりに落ちた枯れ枝を拾うて薪を拵えた。

また今朝は夥だしく樫の實が落ちてゐたので笊にいつぱい拾うた。

樫の實は鷄の餌にするのであるが、このころのやうに玩具の不自由な時代には、友人の子供たちにもよろこばれる。わたくしたちの子供時代には玩具といへば、山や野原の草の花や木の實、竹、木の枝などであつたが、これから都會の子供たちも、それに近い玩具をたのしむことにならう。結構なことだと思ふ。

今朝樫の實を拾ひながら、不圖氣付いたことは一顆の樫の實に見出さるゝ色彩の繪畫的な美、形の美である。縱に描かれた數條の線はきはめて落ちつきあるし

かも複雜な色彩によつて色づけられてある。その形も亦名工の壺に見出さるゝ弧、曲線をほしひまゝにしてゐる。わたくしは一顆の樫の實を掌に載せてしばらく眺めてゐた。自然は一枚の木の葉にも一顆の木の實にも無限そのものゝ深さと美しさといのちをとめてゐる。

初雪の朝わたくしは一顆の樫の實を拾ふことによつて大きな美の發見をしたやうな氣がした。すべての都會的な生活から、一日一日と自然の生活に近づいてゆく今日このころの生活を尊く思ふ。

## 陸海軍病院慰問「淨土」寄附者芳名（七頁ヨリ續ク）

| | | |
|---|---|---|
| 十圓 | 神戸市灘區篠原南町一ノ三一 | 濱村長平 |
| 三圓 | 江戸川區春江町四ノ三 | 内山けい |
| 三圓 | 靜岡縣濱名郡笠井町 | 法永寺 |
| 一圓五十錢 | 愛知縣碧海郡新川町松江 | 松枝戒應 |

## 特志寄附者芳名（敬稱略）

左記の通り本會活動資金にと特志寄附下さいました。

| | | |
|---|---|---|
| 二圓 | 山口縣大島郡沖家屋 | 新山法雄 |
| 六圓 | 東京市小石川區關口駒井町十一 | 谷部禪 |


# 鼻病に評判の良い ビノサン療法

（鼻の病）頭痛頭重、鼻塞り等に苦しみ、始終鼻汁が出て頭はぼんやりし記憶力の判斷力が減退して困ると云ふ方へ是非お奬めしたいのは、手間ひまいらず極めて簡單でキ、メの早いビノサン療法です。

ビノサンは從來の内服藥や洗滌等とは全く異る一風變つた粉藥で、添付の新案吸藥器で藥を吸ひ込めば、鼻腔内深く惡い部分にまで塗布浸透され、直接病因に働きかける結果、使用一回毎にこんな汚ない鼻汁が澤山溜つて居たのか自分でも吃驚する程出て來て、鼻は氣持よく通り、頭もハッキリ輕くなつて、夜分等も氣持よく安眠出來る等快よい藥效が現はれ快癒を早めます。從つてビノサン療法は近時どこへ行つても評判です。

## 無代進呈

ビノサンは、信用と效果を賣つてゐる藥です『臨より實驗主義』で如何に良い藥であるかをお試し願ふて居ります。今迄ビノサン療法を御實驗なされた方々の中には、效果を實讃の餘りそれからそれへと俗に『傳出し藥』だと好意をもつて宣傳へて下さる有樣です。詳しい説明書は左記本家に『淨土』で見たと記入御申込次第どなた樣にも無代で急送申上げます。

藥價は大衆的廉價で二圓（十日量）五圓（三十日量）九圓（二ケ月量）各新案吸藥器付（送料内地十錢海外四十二錢です）、本家の東京市淺草區藏前三丁目五ノ八小判屋（振替東京二〇二番）へ御註文下さい。

# 中將姫物語（三）

高橋良和

春はいち早く大和路に訪れてゐた。

さんさんとふりそゝぐ日の光に當麻の里はくつきり浮いてゐる。

「御免下さいませ。」

訪ねる人の少いこの中將姫の庵を、今しも六十の齢を越したと思はれる巡禮の僧が、しとやかなものごしで訪ねてきたのである。

「お通りなさいませ。」

やはらかな返事が奥からながれて、未だ二十四歳の若い尼の中將姫は、書き寫す稱讃淨土經の筆をとめて、春日のさす椽側に歩みよつた。

「まことに申兼ねますが、中將姫にお目にかゝりたいので……。」

「いづくの方かは存じませぬが、中將姫は私で。」

「まー、姫。」

かう云ふなりこの巡禮の僧はわつとばかりに椽側に泣き伏した。

「まあどうなさいました。何か事情でも。」

じーッと滅入る様に、この僧の衿元に目をそそいだ。

久しく諸國の國々を旅してゐる僧とみえて、よごれた肌衣、髯ののびた顔、やつれた姿、なにか事情があるならんと、靜かな口調で聞き返してみた。

「何か事情でもあつて。」

「……」

「私で出來ることなら、如何様にもいたします程に、わけを話して下さいませ。」

「はい。」

かすかな聲で返事をするとこの老人の僧はぽつり〳〵と中將姫の前に語つたのである。

「姫、よもや私をお忘れではございませんでせう。長らく姫のお家に仕へてをりました、山下藤内載則のおちぶれた姿で御座います。」

「まーあの藤内の。」

「へいまことにお恥しいこの姿、」

「さあ、藤内そのわけを早く聞かしておくれ、私は今佛につかへる身、きつとお前の心の内にも何事かあるだらう早く懺悔して……。」

「はい。」

嗚咽を交へてこの件は、一部始終をすつかりうちあけたのである。

山下藤内として仕へてゐた折、はからずもこの姫を殺害せよとの餘儀なき方からの命をうけて、闇夜にまぎれ姫の部屋の近くに偲び入り、いざひと打ちにと、切りこまんとした折、はからずも、それを止めた一人の武士、何小剛なと腰の刀を拔いて一太刀浴びせて引きあげた藤内であつた。

えゝ残念、遂に姫をとり逃がしたかとことの露見をおそれて我が家に引きあげ折も折たつた一人の子供の小次郎が、何者かにかゝつて打たれたと云ふしらせである。手を靜に胸にあてゝ考へてみた藤内、よもやあの折の……あの時刻、あの大刀の受けかた、あの身體、さわぐ胸をおさへて子供の小次郎の姿をみたとき、はつと云つたきり聲が出なかつた。

今ほど悪因悪果をはつきり知つたことはない。姫を打つべく忍びこんだ藤内が遂に如何なる因縁か姫を打たずして子供の小次郎を手にかけたのであつた。

自分の仕へる館の姫を亡きものにせんとして、遂に我が子をあやめたこの藤内の因果な姿なのである。

「姫、笑つて下さいませ。」

「……」

「それからあとゝ云ふものはせめて我が子の菩提を弔ひ、身の上につもる業障懺悔のために頭を丸めて出家となり諸國六十餘州を巡禮して姫のありかを訪ねてまゐりました次第、何卒私が如き悪人も姫の力でお救ひ願へば」

「今のおことば私は何を聞くよりうれしう存じます。その心がけ、私が許すの、許さぬと云ふことでは御座いませぬ。たゞ一すじに佛さまにすがるより外に……。」

「勿體なう御座います。私が如き悪人が。」
「何を申されませう。あなたのこの心がけ、きつと佛も手をさしのべて……。」
「ありがたう御座います。」
裾の塵を拂つて上る藤内、手をとつて導く中將姫、そこには香煙縷々とたちのぼる庵にかゝげられたうれしい淨土の蔓茶羅、
「姫、これは。」
「藤内、さゝ手を合はしませう。」
靜に見上げる蔓茶羅に細々と香のかほりゆらぎて、淨土の姿が目の前にあらはれてゐる。
掌をしつかり合はせば合はすほど、藤内の目から涙がとめどなく流れてきた。
「藤内殿何もきいて下さいますな、この蔓茶羅をしづかにごらん下さいませ。私の身體は今この淨土に遊ばさせていたゞいてをります。貴男も共にこの蓮の臺にのせていたゞくよう、その心がけが」
「姫、わかりました。きつと姫のお導きで佛の道に。」
「藤内殿、念佛を。」
「はい。」
庵をめぐる僧坊はのこりの春の日に照りはえてゐる。花吹降の中に、今佛の道にすがる藤内の念佛する聲がかすかにもれてくる。
當麻寺は晩春の名殘のなかにつゝまれてゐる樣であつた。

齋藤　清臺

# 物心二つの救ひ

廣島縣安藝郡嚴島町にゆくと、「誓眞釣井」といふ井戸があつて、どんな炎天が續いても、また旱魃があつてもこの井戸だけは涸れることがないといふので有名である。
寛政五年の夏のこと、いつにない照りが續いて島の井戸は全部涸れてしまひ、山の清水を導いてゐた竹樋も乾ききつて割れてしまつた。人々は水を求めて苦しみ喘いだ。丁度この時、御佛につかへ人を救ふに寧日なかつた僧誓眞といふものがあり、この僧が苦心して井戸を掘ると、それまでの研讃のかひあつてか、新しいその井戸からはこんこんと清冽な水が湧き出し、人々を雀躍させたのであつた。
いつかこの井戸は「誓眞釣井」と呼ばれるやうになつて、今に彼の高名が傳へられてゐるわけである。
誓眞はまた「宮島みやげ」で名高い「宮島杓子」の考案者であり同時にまた發賣者でもあつた。この小さな杓子のために、地方の人々がどの位生活を助けられ、暮しが樂になつたかはかり知れぬものがあつた。このやうにして杓子の製作と賣り出しが成功したのをみた誓眞は杓子ばかりでなく、盃、筆筒、茶具などをも考案して新しい「島のみやげ」をつくつて行つた。誓眞は人々のために、人々が利益を得るために各方面で働いた。道が惡ければそれを修理した。溝も開いた。石段も造つた。
彼は俗名を政次郎といひ、村上甚介といふ米屋の二男に生れた。幼い頃から彼は親孝行と人

に親切なので人々から愛敬されてゐた。彼が二十歳の冬のことであつた。彼が店さきでもう戸締りをしようとしてゐる所に、みるからに窶れた女が米を買ひにきた。何げなくその女に「いくらあげますか」と彼が問ふとはじめはもじ〳〵してゐたものの、やつとのことでこう云つた。

「まことに済みませんが、お金の都合がつきませんので、こんな物を持つてきました。これでお米が戴けないでせうか」

その女は細い聲でやつとこれだけを云ふと、袖の下からかくし持つてゐた赤い花模様の着古した着物を差し出した。

彼はその女からそれを受取つてみて、着物を手にするやそのせつなギクツと彼の胸に感じたものがあつた。外でもない、その着物は今家で脱がせたばかりなのであらう、まだ温い子供の體温が残つてゐたのであつた彼は奈落の底におち込むやうな氣がした。明日の米を買ふために子供の着てゐる着物を脱がせて持つてきたのである。

「お米なら何時でも用立いたします、お子さんが可愛さうです。風邪でも引かせては大變です。これは戴かなくてもよいのです」と、彼は着物を女の手に押返して、急ぎ米を女に渡した。

このことがあつて彼は毎日悩んだ。何うしたらあんな人達が救はれるのであらうと考へなやんだ。その結果、彼は嚴島の浄土宗光明院に了單上人を訪ねて弟子になつた。その時上人はこういつた。

「……身の一大事に氣付かれたのは大いに結構なことである。人を救ひ世を救ふことは、また己をも救ふことである。米を買ひにきた貧しい女は觀世音の化身とも申されよう。大君の下、この世の中に一人の不仕合せな者もないやうにと希はれるのが、主上の御心、御佛の慈悲である。結縁に感じて、道心固く救世の途に竭されなさい」

政次郎は改名して誓眞と呼び了單上人のもとにあつて佛道修業に精進を續けた。

誓眞は島の人々が生活に喘ぎ疲れてゐる姿をみると、一體何うしたらこの人達を救ひ、現實的な悦びを與へ、更に法悦を味はせることが出來るのかと考へ抜いた。そして先づ第一に巷を肥すこと、人々に生活の安定を與へることが先きであることに氣がついた。墨染の衣に唱名念佛を包んでゐただけでは御佛の慈悲は衆生に傳へられないのだと思つた。そのあげく誓眞が手をつけ始めたのが「宮島みやげ」の杓子の考案と、島の人達にこれが製作を普及させることであつた。誓眞はこうした努力を重ねてゆく間に、幾度彼の頭に、かつての貧しい女、子供の着物をかゝへて米を買ひにきた樣子が浮んで、彼をはげましたか知れなかつた。

誓眞の努力は遂に報ひられた。窶れた女の顔は島にみられなくなつた。彼は寛政十二年八月六日に極樂往生をとげたが、毎年八月六日の命日には誓眞祭が行はれ、島民の變らぬ感謝の眞心が捧げられてゐる。

# 元日に念佛申して

（西峽廬雜記）

佐藤賢順

北を屏風のやうに山で圍まれたこの海沿ひの鎌倉は、秋の訪れが遲いといはれるが、それでも十月の半ともなれば、山の樹々が色づいてくる。狐色に黄ばんだ樹の葉が、風に颯々と鳴るのを聞きながら歩いてゐると、つい散歩の足が延びてしまつて、何かしら幽遠なるものに誘はれるやうに、或る日私は秋の山路へと踏み入つた。

鎌倉ももうかなり奥で、市街の煩はしさを餘所に、靜かな秋の陽を浴びて清閑そのもののやうに光觸寺の古い御堂が靜まりかへつてゐる。私は突然ここを訪れた。

このお寺は頰燒阿彌陀と頰燒阿彌陀緣起とで名高い。豫てそれに氣を惹かれてゐたし、その緣起物語が無住禪師の『沙石集』といふ本に出てゐて、記憶に殘つてゐるので、一度尋ねたいと思つてゐた。

また面倒な話になるが、『沙石集』は鎌倉時代も末に近い弘安六年に梓行された隨筆集で、當時の綺談に取材したいろいろの物語を載せ、珍しい見聞を傳へてゐる。佛道の要諦を教へ込むために民間說話に假托した文學で、著者無住は鎌倉の人、その目は、闌菊美を競ふその頃の佛敎界を、各宗諸寺の生々とした動きを、民間信仰の實際の有樣を、見てゐたのだから、書き遺した所もまた興味が深い。

法然上人のお弟子の隆寛律師やまたその弟子の智慶や願行などが、念佛の弘通に力を竭した有樣も聞いてゐたし、やや遲れて記主禪師が鎌倉へ來てからの淨土敎の弘まる樣子なども見てゐたであらう。事實、願行房のことについては書き及んでゐるし、風に煽られ

る野火のやうな勢で擴がつてゆく新興佛教に對しては如何ともなし難いことは、一度ならず告白してゐる。

これに出てゐる頬燒阿彌陀の物語といふのは、次のやうな梗概である。

——鎌倉に町の局といふ名高い女人があつた。童女を一人召使つてゐたが、この女童がいかなる宿善があつたのか、念佛を信じて人目を忍んでは祕かに口に唱へてゐた。所が主人の局は念佛など大嫌ひで、ひどい緣起かつぎ、祝事に憂きみをやつすといふ人であつた。元日にこの女童に給仕をさせてゐると、女童は主人の緣起かつぎを知つてゐるので、口に出す氣はなかつたのであるが、いつも口癖になつてゐるので、つい

「南無阿彌陀佛」

と言つてしまつた。主人は怒るまいことか、

「何といふことです、この人は……。今日はお芽出たい元日だといふのに、人の死んだ時ではあるまいし、お念佛など口にして……いまましい。」

と物狂ほしく呶鳴り立てた。その果は女童を捕へて、無慚や、赤く燒いた錢を左頬に押し當てた。女童は、殊勝にも、念佛のためならば如何なる罪咎を受けようとも悔いることなしと、心を勵すのであるが、流石に心亂れて佛を念じ佛に縋るのであつた。

さて、主人は暫くして年始のお勤めをしようと持佛堂に入つて、本尊の阿彌陀佛の金色燦然たるを仰ぎ拜すると、これはどうしたことか、御頬に錢の形が黑くついてゐるではないか。怪しみつつ近く寄つてよくよく見ると、紛れもなく先刻金燒きした錢の形が、丁度女童の顏のその所と覺しきあたりに見えてゐるのである。事の不思議に驚き慌てて女童を呼んで顏を見ると、なんと、頬には少しの疵も殘つてゐない。主人はいよいよ驚き、その所行を慙愧懺悔して、早速佛師を呼んで、如來のお顏に金箔を押し直させた。けれども金箔は幾重に重ねても、疵は遂に隱れなかつた。今もその佛は坐ます。かないやき佛と申して、まのあたり拜むことができる。今はその疵が三角に見える。——

といふのである。その佛樣が光觸寺の本尊で、運慶作と傳へらるる木造の立像阿彌陀三尊である。老住持の配慮で御戸帳が上げられると、端嚴な全容が現れ出でた。奈良時代に見る閑雅典麗な趣もなく、貞觀藤原期に見られるやうな優美豐麗な味もない。が、それに代る强さがある。ともすると軌道を逸脫して耽美的な方向へ流れ去らうとする藤原末期の危さを、ピンと撥ね返へして强く緊き締めたあの鎌倉時代特有の强さ、空想的、觀念的な强さでなく寫實に卽しての現實的、卽事的な强さである。衣紋の刻みなども强く鋭い。概括的な言ひ方になるが、鎌倉期の作品を見てゐると必ず誰かを思ひ出して、あの顏だな、と思ひ當るところがあるが、藤原・奈良・飛鳥と古へ遡るほどさういふことが少くなつて、その顏は誰に

でも當嵌るやうになる。鎌倉期の作品の強さは誰にでも當嵌る類型性にあるのでなく、誰かを思ひ出す。即事性にある。（尤もこの點がまた別の缺陷を包んでゐることにもなるのだが……。）私はいま克明に刻まれた端正なお姿の前に立つて恭々しく仰いだ。「三角に見え侍る」と無住が書いた疵跡はいまは多角形に大きくなつてゐるばかりか、反對側の右頰にも、からだ中の此處彼處にも、金箔が剝げて漆の黑い下地があらはになつてゐるところがある。

寺には頰燒阿彌陀緣起が紙本淡彩の繪卷物二卷となつて藏せられてゐて、本尊と同樣に國寶に指定されてゐる。それは詞書と繪とで本尊の靈驗物語を順序を追ふて描寫したもので鎌倉末期の優作であるが、生憎本物は鎌倉國寶館へ保管されて見ることができず、德川時代の末に出來た模寫の繪卷を繰り擴げて、本物を偲ぶより他はなかつた。老住持の話では、本物よりは模寫の方が新しく綺麗なので、この方を大切にして、雨の日など近隣の青年など寺の本堂へ集つては、これを繰り擴げて樂んだといふ。

然しこの繪卷に描かれてゐる緣起は、無住が『沙石集』に書いてゐるところとは、話の荒筋に於いて大同小異であるとはいへ、細部に及んでは可成りの隔りがある。老住持は、無住の聞き違ひであらう、といふ意見であるが、無住の生來の奔放な空想力が自由な創作を企てたのかもしれない。私はいまそのいづれが眞相に近いかを問ふのではない。『沙石集』に書かれてゐる物語の、元日に念佛申して、主人から、

「いまいましく、人の死にたるやうに、今日しも念佛申す事、返へす返へす不思議なり。」と呶鳴られて非道なめに遭はされたといふ點が、この物語を讀んだときから氣になつてゐた。

× × ×

今ならば、元日に念佛申して緣起でもないと忌み嫌ふ人があるかもしれぬ。あつてもさほど珍らしいとも思へないが、一世が火と燃える宗教的情熱に驅り立てられてゐる鎌倉の世は、念佛と生活とが密接不離に融け合つてゐる筈なのに、そこになほ、現實生活の幸福と宗教生活とを別に考へて、念佛を忌むべきものとしたもののあつたことは、私どもが描いてゐるその頃の世相とそぐはないやうな氣がする。元日であらうと大晦日であらうと念佛するに何の猶豫があらうぞといふ差し迫つた心持を、私どもはその時代に感ずる。生死といふ一大事が焦眉の急として今日に迫つてゐる。この明日へ持ち越すことなく今日超克しなければならぬ問題に、驀直に身を投じてゆく火のやうな熱情が鎌倉佛教の姿であつたと想像される。何宗であらうと祖師の誰であらうと、鎌倉佛教はいづれもこの生死の問題を出發點としたのである。

それについて、『沙石集』はまた、元日こそと、毎年大かかりな念佛をした例話を載せてゐる。

――昔、丹後國普甲寺に上人があつた。極樂往生を願ひ萬事を捨

## アリユウシヤン群島にある
# 皇軍を思ふ

岩野喜久代

北のはて濃霧、激浪、風雪の生るる島にわが兵のある
大君の兵まもるなり北の海時には凪ぎて日を見せよかし
つはものら寒に具へて焚くと云ふ島のつる草盡きずあれかし
穴ごもり熊に似たれど日の木の北の防人安き日もなし
冬となり氷の海を船行かず訪ふものは敵の機ばかり
月出でて氷の海の輝くを如何に見つらん遠征の兵
流氷のただよふ海に出沒す佐久間大尉を繼げる將兵
アラスカは間近し敵の公路成り新島守の任重きかな
聖天子安くましませおん前に死をねがはざるみ民あらんや
秋津洲神の創りて三千歳を經たり世界に今ぞ輝く

てて臨終正念のことばかりを思ひ聖衆來迎を願つてゐた。その志の切なる餘り、

「世間の人は正月の初めは願ひごとを祝事にする習であるから、わしも祝事をしよう。」

とて、大晦日の夜、召使ふ小法師に書狀を書いて渡した。

「この手紙を持つて明朝早く來て門をたたけ。わしが『何處よりおいでか』と問ふから、『極樂より、阿彌陀樣のお使です、お手紙を持參致しました』と答へて、この手紙を差出すのだぞ。」

と命じて元日を待つた。朝になると小法師は門をたたいて約束の通り問答した。上人慌て騒いで走り出で、手紙を受取ると押し戴いて讀んだ。阿彌陀樣からの手紙には、

「娑婆世界は衆苦充滿の國なり。早く厭離して念佛修善勤行して、我が國へ來るべし。我れ聖衆と共に來迎すべし。」

とあつた。これを聲高に讀み上げつつ、嬉しさの餘りさめざめと泣くのである。

これが毎年繰返へされた。

その國の國司が下つてきてこの話を聞いて、隨喜して上人に對面した。

「何事にても仰を承つて御緣を結びませう。」

と言つたけれども、

「遁世の身ですから、別に所望もありません。」

といふさりげない返事であつた。國司は重ねて、

「遁世の身とて、事こそ變れ、人の身には必ず何か必要なことがあるものでせう。」

と尋ねた。しひて言ふので、

「それでは、迎講と申して聖衆來迎の講會がありますが、その莊嚴をして心をも慰め臨終のならしにもしたいと思ひます。」

と望を述べた。國司は迎講に入用な佛、菩薩の裝束を所望の通り一揃ととのへて贈つた。それから後は、聖衆來迎の儀式を年々元日に取り行ふこと年久しく、臨終には望の如く聖衆來迎にあづかつて芽出たく往生の本意を遂げたといふ。——

かういふ話はどこまでが本氣でどこからが芝居氣だか解らず、假想的に仕組んでやつてゐることが、いつか本氣に思へてきて、仕舞ひには、虛實互に溶け合つて、やつてゐる當人でさへその甘じめが解らなくなつてしまふであらう。一篇の馬鹿氣た笑話であると言へばそれまでであるし、これを書いてゐる無住は、(それを紹介してゐる私もまた、)この物語と自分との間に相當の距離を感じてゐる。

然し無住はこの物語の意義を、極めて高く評價してゐる。「實に物にすき其の道を好まん人は、癖に其の事を心に染むべし。習さきよりあらずば、懷念いづくんぞ存ぜんと云へり。能々思ひ染みならすべき臨終正念の大事なり。」習さきよりあらずば、懷念いづくんぞ存ぜんと言つてゐるのは面白い。

更に言葉が續けられて、現實陶醉に對する無住の警告が述べられてゐる。世の人々は、長い間の習であるとはいへ、現實の慾望生活ばかりを重く考へて、榮華富貴を憧れるから、正月には下らないものなどあれこれと取り集めて緣起を祝ふ。去年も祝ひ、一昨年も祝つたのに、今年は別段よくなつてはゐないではないか。それなのに性懲りもなく、また祝ひ合ふ。感覺生活の充足を希ふ半面は、當然、その生活の打切りを意味する死を忌み嫌ふこと甚だしく、死といへば數の四さへ音が同じだといふので忌み嫌つて避ける。四を嫌ふ習慣はその頃からあつたらしい。ここで無住の辛辣な批評が續く。「正月は殊に恐るべき死せる魚鳥を家の内に取り入れて、切り盛り熬り燒くは、ただ人畜に異なれども死の形同じければ、葬送の儀なるべし。經には肉を食する口をば死屍を捨つる塚なりと云へり。」かやうな批評は、現今から見れば、必ずしも妥當だとはいへないが、その頃の眞摯な求道の態度を窮ふことはできる。「精進潔齋し、戒を持ちて佛につかへんこそ、壽命福德も芽出たかるべけれ、正月には最もこれを行ずべし。世間の人の物祝ひかへすがへす道理なく侍べり。」ここに鎌倉佛敎のひたむきな歩みが讀み取られる。世俗的な慾望追求の生活は、もしそれだけを切り離してみるならば、その頃よくいはれたやうに、「泡沫」の如く「朝顏の露」の如きものである。それは淸く高い宗敎生活に基礎づけられてこそ、眞に榮えもし幸せにもなる、壽命福德もまた芽出たかるべけれである。

# 會のたより

## 陸海軍大臣感謝狀
## 更に四回授與され
### 計卅八通の多きに達す

明るく正しく感謝に生きる職域奉公に邁進する本會に對して、今回陸軍大臣より四回に亙つて感謝狀が授與されました。かくて日支事變開始以來今日に至るまで、陸海軍大臣から本會に感謝狀を授與されること實に三十八回の多きに達しました。かく度重なる光榮に本會部員一同は大いに感激し、更に一段と發奮してますます御奉公の誠を至すべく努力してゐます。

---

拜啓　時下愈々御清穆之段奉賀候陳者毎々より入所將士御慰問の思召を以て良册「淨土」の御寄贈を辱ふし玆に深厚なる謝意を表し候尙御芳志に對し入所將士一同感泣在龍候此の上は一層療養に專念し再起奉公を誓ひ居り候條乍他事御放念被下度候。今後共に一層御援助相仰ぎ度奉懇願候。

右不取敢御禮申述度如斯御座候

昭和十七年九月廿二日

傷痍軍人福井療養所　兒玉要三

眞野　正順殿

◇大東亞戰爭の次ぎ次ぎと報ぜられる赫々たる武勳に驚異の眼を見張り、感謝の誠を捧げ、武運長久を祈りつゝ日々職域奉公に精進いたしてゐます。毎月御發行下さいます「淨土」は、手もとに八册となりました。一册一册と讀む毎に一日一日と修養をつみ、實社會に一人出て、青年時代の誘惑にもまけず、清く正しく、寄宿舍生活の自由な身でありながらもかくもかくも立派に生活をさしていただいてゐます。これは自個の修養にもよるでせう、「淨土」の御指導にもよるでせう、しかしほんとは法然上人の導きとお敎へによるものだと信じてゐます。そして尙一層深き信仰に生きたいと思ひます。今度給料をいたゞいたなら、中村辨康先生の「日常勤行式講讃」を研究し、日曜などに近所のお寺に參詣し、讀經したり、また和尙樣にお話をお聞きしたりして、とかく靑年時代のうわきな生活を愼しみ、燃料廠の重大なお仕事に精進いたす覺悟であります。最後に御一同樣の御健勝を祈り、ますます「淨土」が、法然上人のおさとしが、廣く世に擴つてゆくことを切に祈り申し上げ、一筆感想を申し述べました。（德山市橋本町第一鼓ヶ浦寮四八號田中端）

◇「淨土」のおかげで幸ひな朝夕をすごさせて頂いてゐます。先日京都の傷病軍人療養所から突然にしらぬ兵隊さんからお便りを頂き「淨土」誌上を通してのお知合ひになりました。そのお手紙にこうありました。「……私も毎月淨土を讀ませて戴き色々と信仰への道を求めてゐます。實は先月號に貴女樣の心から念佛を申され、毎日幸福な日を送つておられる由の記事を拜見いたし、失禮とは存じながら御敎示を仰ぎたく手紙を差し上げました。（中略）貴女樣が幸福な念佛の毎日を送られる樣になるまでには色々と荊の道を通られ、苦しい何ものにも打克つて來られた事と推察し申上げます。眞實の信仰を得るまでの過程と申しませうか、どうしたら念佛を申されるやうになりませうか。何卒お暇の折に御敎示下されますれば誠に幸甚と存じます。……山崎伴作」（神戸市寺池町一丁目八四中本千代）

# 雜話雜記

子母澤寛

千葉の銚子は、上州高崎松平右京亮の飛地になつてゐた。だからあすこで少し大きな事件が起きると、關係者は一々高崎へ呼出されたものである。この銚子へ首のない胴體が苞包みになつて流れついたのを、漁師の源兵衛といふのが拾つて、眞つ蒼になつて、代官所へ屆出た。これが同じ下總笹川の俠客岩藏繁藏、俗に笹川の繁藏といふものゝ胴體で、繁藏はところの大きな醬油釀造家の小旦那である。

からだが大きくて、相撲が強くて、そんな事からぐれ出して博徒の群に入り、とう〳〵勢力爭から、同國海上郡飯岡の助五郎といふものの子分に笹川の村はづれで暗殺された。

首をその時に襲撃した奴が持つてかへり、助五郎に見せた迄はわかつてゐるが、それから先きこれをどうしたかはわからなかつたが、それはまあいゝとしてもとんだ災難は胴體を拾つた源兵衛で、このために、さあ高崎だ、これ來いまた來い、やつと銚子から出かけて行つて一調べが片づいて、銚子へかへると、もうその次の呼出しが待つてゐるといふ譯で、とう〳〵、自分の商賣をする事も出來なくて、お終ひには隣近所の人達のお世話になつて、死ぬ迄高崎通ひをやつたといふ。どうも昔は、役人なんかといふものは、他人の

迷惑などは考へて見てもやらなかつたものらしい。

＊

その胴は、その後笹川へ改葬した。ここには繁藏、勢力富五郎、所謂俗に云ふ平手造酒。二人の墓が、實に立派に出來てゐる。田舍なんかでは、ちよいと見られぬ立派さである。富五郎は例の金毘羅山の鐵砲腹で名代な男で、これも草相撲のくづれである。昔のやくざものでは、相撲崩れといふのがずいぶんあつた。

平手造酒は、本當は平田深喜といふ人間だ。何處の人間かどうしてこんな處へ流れ込んで博徒の用心棒なんかになつたものかそれもわからないし、腕前だつてどの程度のものかわからない。たゞ飯岡方の襲撃を迎へて、笹川方で死んだのはこの人一人、全身十一箇所といふ深傷であつた。

この人の墓だけは以前から一尺位の小さなものがあつて、それには平田氏之墓とあつたが、改葬の時に、その墓を掘つて見たけれども何一つ出ては來なかつた。或は餘り小さな墓だから、いつの間にか位置が移動して終つてゐたのかも知れない。

＊

さて、繁藏の首である。その立派な墓を建てるについて、是非飯岡方で首を埋めたところを知りたい、そして、首と胴とを一緒のところに埋葬してやりたいといふので、私も頼まれていろ〳〵飯岡方を調べて見るが、何分にも文字のない社會の出來事だし、更らに寄るべき記錄がない。

たゞ、ちよいと引つかゝりになるのは助五郎の菩提寺に云ひつたへがある。それは助五郎が死ぬ時に、自分の墓を建てる場所を指定して、その墓の隣りにある土饅頭は大切な人間の首を埋めたところだから、必らず土饅頭を崩したり粗末にしてはならぬといつたといふので、その小さな土饅頭はその時もそのままになつてゐた。

いろ〳〵な事情から、それが繁藏の首塚だとも考へられない事はないので、いろ〳〵評議の結果、これを繁藏のものと決定した事がある。或は違つてゐるかも知れないが、また本當かも知れない譯である。

＊

親分などゝいふものは生前は大そうな勢であるが、さて死んで見ると、しかし時代のすゝむにつれて親類の者さへそれが自分の家のものだといふ事を忌やがる場合も出て來る。俠客といふやうなものゝ解釋は時代と共に變化するものだから、これをたゞの悪黨のやうに見る時代は親類もそんな事にするし、

謹賀新年

昭和十八年一月一日

法然上人鑽仰會本部一同

さてまた少し芽が出て來ると、わたしが孫の孫のその孫でなどゝ名乘つて來ることもある。人間なんて薄情だ。第一この助五郎の墓は、その助五郎が疊の上で大往生をして埋まつたものだが、一と頃、戒名のところをやすりで削つて誰のものやらわからなくした時代がある。

*

元來助五郎といふ人間は、少しおかしなところもあるが、またなか〳〵思ひ切つたいゝところもある人間である。飯岡は九十九里の荒濤だから、漁船がことで度々遭難する。だから、あすこら邊の子供は尋常二年位になるともう遭難といふ漢字も知つてゐるし、言葉はほんの子供の時分から意味を知つてゐるといふ。この遭難で、一時に三百人からの人間が死んだ事がある。云はゞ村の働き手が悉く遭難して、もう飯岡は立行かないといふ事になつた。

その時に助五郎が、自分の生國たる三浦三崎へ出て行つて、殆んど同數の若いものを引連れて來て、これを各戸に割振つた。婿になるものもあり、養子になるものもあり、とにかくこれで村はまた生き返つた。ちよつとした大きな社會事業家だ。

尤もこの人間達がみんな自分の子分になるから、自分が大親分になるために、そんな事をやつたのだらうなどゝ氣を廻さなくてもいゝと思ふ。この爲めに、助五郎は莫大な借金までしてゐるのである。

それで飯岡でも、學校の校長さんなどが奔走して、助五郎の立派な碑を建てゝある。繁藏の墓よりもいつそう立派だ。

*

千葉の俠客を書いた序手だから書きませう。水郷の佐原に、佐原の喜三郎といふものがゐた。ちよつと女たらしらしいところがあつて話はさつぱりと行かないが、明治十六七年頃に、柳亭燕枝の口演によつて伊東橘塘が島衛沖白浪といふ小說に書いた。これが評判ですいぶん度々講釋席などでよまれるが、あの時分の噺家や講釋師などは事件が起きると早速その土地へ飛んで行つて、事實を調べては直ぐに板にかけるといふ、詰り寄席でやるので割合に調べも行屆いていゝものがある。この喜三郎の一件もいゝ加減のところもあるが、後ちに記錄にぶつつけて見て間違つてゐないところもある。

佐原に墓があつて、云ひ傳へでは喜三郎は江戸で牢死をしたから、その片身の品だけを埋めたものだといふ事になつてゐた。この牢死說は、島衛をそのまゝに信じたものであるが、前年私が行つた時に、いろ〳〵お寺の過去帳や何にか引つくり返して見ると、喜三郎は牢内では死んでゐない。とにかく八丈の島破りをした男だから當然首を斬らるべき罪狀だがどういふものか、重病といふので牢拂ひになつて、江戸の假住居で死んだのである。當時、江戸は勿論、諸國の俠客からの見舞の金やら品物で、この喜三郎の放蕩の爲めにつぶれた實家が再興出來る程だつたといふか

ら、牢内の役人や何にかにも充分賄賂が利いてゐたものであらう。

この病死體を行德まで舟で運び、それから陸路を佐原へ來たらしく、墓の下は正に喜三郎の土葬に相違ないのである。

＊

同じやうなのは甲州の黒駒勝藏だ。これも甲府の牢屋で首を斬られたといふだけで、死體はそのまゝ棄てられたらしく、墓もないといふことであつた。

ところがこの黒駒出身の堀内良平翁が、勝藏研究に大そう執心で、私を誘つては二度も三度もここへ出かけ、時には講演會を開らいたりして奔走大いに勉め、「勤王俠客黒駒勝藏」といふ原稿もすつかり出來上つて、本にするばかりになつてゐる筈である。やがて出版される事だらう。

この調査行で、すぐにわかつたのは、勝藏は死體のまゝ棺桶へ入れられて、牢の裏口から親類へ引渡しになつた。それを黒駒の實家へ運ぶと、おやぢといふのが頑固一徹で、そんな死骸は數居内へ入れられないといつて受付ないので、近くの地藏堂前の空地へ埋め、墓も建てられないから、小さな地藏尊をきざんでその上へ置いた。それが今も殘つてゐるし、その時に穴を掘つて、棺を埋めた人も最近まで殘つてゐたので話ははつきりしてゐる。

勝藏は打首ではなく絞刑に處せられたらしくもあり、一服盛られたらしいところもある。とにかく顏は紫色になつてゐたといふ。私は毒死説をとつてゐる。

しかし殘念な事には、とにかくその近く迄四條隆謌卿の御親兵で働いてゐたのが、何故、牢でこんな死方をしなくてはならなかつたか、この大切なところがはつきりしない。御親兵とはいつても要するに文字もない男だから、用心棒程度のものであつたかも知れない。何にかこの邊に理由がある。

＊

眞山青果先生の芝居に土佐の岡田以藏を扱つたものがあつて、都合のいゝ時は、さんざん使つたが、少し世の中が納まつて來ると、こんな文字のない亂暴な男は困るといつて毒を盛るのがある。岡田はそんな死方をしたのではないが、かうした人間をかうした扱ひ方で處理をした事は必らずしも無いとは云はれない。

いやむしろ大いにあつたらう。勝藏などといふ人間は、御一新で世の中が治まつて見ると、それ迄の多少の功績もあり、實に厄介な存在になる事は事實だ。

＊

かうした觀點から維新後のいろ〳〵な所謂志士達の身の落着き方を見て行くとなか〳〵面白いものがある。そしてそこに人間の淺ましさ、いゝ加減さが、ちよい〳〵と覗き見られる。

——十二月空晴れて寒むし——

# 清譽上人のお話（一）

十一月の或る日の朝、増上寺の法主清譽上人台下には玉川の茅屋をお訪ね下された。朝の中から門前、庭などを掃き淨めてお待ちいたしたことであつたが、山茶花はさかりで、紅葉も燃えはじめたところであつた。

御晝餐には裏の畑のやつがしらと修善寺の椎茸などをお上げすることにした。落ちついて靜かに御話を承るにはこの上もない時雨日和であり、庭の木立にはひたきも鳴いてゐた。台下には裏の竹山が嵯峨のやうだなどとも仰せられ、夕刻まで四方山の御話をなされ、さりからの雨の中を瀬田の停留場までお歩きになり、滿員電車の中をお立ちになつたまゝ増上寺へおかへり遊ばされた。これはそのをりの御清話の一部分を道瀬幸雄君に筆記していたゞき、それに多少わたくしが補筆したものである。（吉田絃二郎記）

# 近藤裕子

大島徹水（述）

近藤裕子は越後の村松の人である。私も今年、その墓に參つて來た。（村松は長岡から少しへだたつた處）

維新當時長岡は朝敵となつたが、村松藩も亦その傘下に走つたので、裕子は戰爭の時に村松藩の殿樣を籠に乘せて逃げさせ、殿樣を朝敵たることから救ひ出した。

ともかく維新の際に於いて、若き女性の身として勤皇の大義に徹した女丈夫であり、もしこれが雄藩にでも生まれてゐたら、一層有名になつたであらう。が、ともかく今日

故郷村松に於いては勤皇女丈夫として、郷黨の矜恃となつてゐる。

私の逢つた當時裕子は駒込あたりにをつて、動坂で近藤の婆さんと云へば大概知つてゐた。森田寶丹の別莊の隣りであつた。今とは違つて非常に寂しい處であつた。

元駐米大使の齋藤博の父親の齋藤祥三郎（この人は外務省の飜譯官をやつた事もある、英和辭典の著者）もよく近藤の婆さんの處へ來てゐた。當時齋藤は信州の中學校の校長を勤めてゐたが、東京へ出て來た時は自分は他に宿をとつて、妻子は近藤の婆さんの處に預けてゐた。後年駐米大使となり、米國で歿くなり、米艦によりて遺骸を送られて來た齋藤博はそのころはまだほんの子供で、カルタをとる時にさわぎ廻つて手をひつかいたりしてゐたものだ。

乃木さんの氣に入りの川島浪速なぞも來てゐた。

ある時元曹洞宗の坊さんの水野梅曉が私のところへ來て

「お前は魚を食べないから、月に一度わしが五目飯を食はせるから、近藤の婆さんにお經を教へに行つてくれないか」

と云ふことになつて、それで私は近藤の婆さんのところへ連れて行かれた。そんなことで私は近藤の婆さんにお經を教へることになつた。

近藤裕子の話しによると、「自分の亭主は何かの事件で武士道のために腹を切らねばならん事になつたが、明治の時代に腹を切るなぞと云ふことは却つて他人に笑はれるから、わしは今日限り世を隱れる」と云つて行く先をあかさず出奔して、三井寺へ行つてしまつた。そしてその後箕面に落ちついて坊さんになつてゐた。家を出る時「子供の事は賴む、わしのゐない後で子供を訓戒する時は、藤田東湖の「正氣歌」を床にかけて、わしと思つて意見をしてくれ。そして出來るなら軍人にしてくれ」と云つた。

それで裕子は主人のあとを引受けて、百姓をやつて子供を育てた。子供は陸軍士官學校を受けて入學した。

「これで私の役は濟んだから、髮をおろして尼にならう」と裕子は決心した。それで私がお經を教へる事になつた。梵網經を教へた。月に一度か二度教へに行つた。

私が佛教の話をすると

「それは武士道と同じだ」

と云ふやうなことを言つたりした。その時分には川島浪速も遊びに來たりした。その年の十二月一日に息子が士官候補生として由良へ行くことになつた。そこで途中で親に逢つて行けと云ふので箕面へ行つて逢つたさうである。

さすがに世を捨てた父親も、立派に成人した我が子の姿を見ては感慨無量であつたであらう。やがて、父は子のために飯を炊いてやり、親子で飯を一緒にたべたが、嬉しくてよう食べなんださうだ。

裕子のところへは私もその後も度々行つてお經を讀んでやつた。颯田本眞尼に逢はせてやつたりしたのもそのころのことであつた。

私が京都へ行つた時、裕子の亭主は箕面の毘沙門堂にをつたので私もそこまで出かけて行つて逢つた。この人は一日に四合の飯を一度にたべて、あとは何んにも食はなんだ

「こんなになつて、坊さんの修行をする前には何をしてゐた」と訊ねると

「藩の家令をやつてゐた」と云ふ、

「そう云ふ職をしてをつて坊さんの修行するのは隨分難儀であらう」と云ふと、

「いや、これも武士の修行と同じもので、難儀でもなんでもない」

と云つてゐた。その男にはそれきり逢はなんだ。

×

明治卅七年のこと、三河から京都に歸らうと思つて夜汽車に乘ると、その車には私と田舍の婆さん風の女と二人きりであつた。そしてその婆さんが車の中で

「お冷やをくれ、お冷やをくれ！」と云つて騒いでゐる。

それは汽車が名古屋邊を走つてゐるところであつた。私も氣の毒になつたので、「この邊でそんなことを云つても解らない、名古屋では水と云はなければ解らない」と云ひながら、その婆さんをよく見ると、近藤の婆さんである。まつたくの奇遇である。婆さんの方でも驚いてゐる。

「どうした譯だ」

と云ふと、帶の間から端書を出して、息子が旅順の包圍軍に加はつてゐたが、病氣になつて大阪まで來たと云ふ知らせがあつた。それで近所の者は明日にでも早く出かけたらと云ふのであつたが、それを振り切つて、飯も食はずにその場から飛び出して來たのだと云ふ。それで「おひやをくれ、おひやくれ」と云つてゐた譯が解つた。

いかな男まさりの女丈夫も一人息子を思ふ點になるとやはり世間並のやさしい母である。

「それでは死んだのではないから、大阪で息子に逢つて色色話をしてやれ」と云つて別れた。その頃その息子はすでに砲兵士官として出征してゐたのであつた。（つゞく）

# 歌壇

## 岩野喜久代選

名古屋市　鷲津　耕順

つつましくなれる心にみ佛を拜み
まつりて今朝はうれしき

評　今月は應募歌が例月の二倍以上に上り止むなく三分の二を捨てた。併しその割に優秀な佳句は少い諸子の精進を祈る次第である。一位の歌は我見をすてて素直な信仰に入つた作者のしみ〴〵とした法悦がおだやかな表現で歌はれてゐるのを採る。

新宮市　奥村　映水

父に似る鎌のはこびや稻を刈る孫を眺めて老はよろこぶ

評　老も幼きもとり入れの秋に田に働かぬはない。これは老祖父が少年の孫の働きぶりを眺めて相好を崩して喜んでゐる朗景である。第一句でこの少年の父が働きものであつたことが暗示され、その父の手並を繼ぐ孫であることを老人が心よく思つてゐることを歌つてゐる。

京都府　齋藤　耕善

わが心火となりぬらしあまりにも病みて甲斐なきこの身なりせば

評　この歌の外にも戰傷や病を得て療養中の勇士たちの鬱勃たる心情を詠んだ歌が本月は多かつた。華々しき功を建てないで病院生活をする不甲斐なきに心は火の塊のやうにはげしく物思ひをすると云ふ歌である。願くば勇士達よ、しばし心を安らかに保つて、療養に專念したまへかし

北海道　鈴木永太郎

身をゆすり「山本」とかく呼び呼べど答へず友はみいくさに死ぬ

愛媛縣　田　田　生

送らるる我れよりも尙送る身の老いたる母の姿さびしき

北海道　永尾　慶吉

ひたすらに歌をはげみし君なりき咳つつ云ひし言もわすれず

兵庫縣　矢場佐太郎

送りこし爲替にぎりて老いましし父母を思ひぬとく傷癒えよ

傷痍軍人愛知療養所　戸板　勝美

一億が戰へる時病む身われ物のともしさ申すべからず

名古屋市　鶴田　稱眞

庭はきて思はぬ栗をひろひ上げ共にほほ笑むよろこびの朝

京都　福島孝治郎

未歸還機何機と聞くや胸さはぐもだして祈る神のみ前に

東京市　八木澤壽美男

ふるひ起つ師走八日の感激は未だありありと胸底にあり

兵庫縣　鴨田　心助

ふるさとの美保の關こそこひしけれみいくさに病み白衣着ぬれば

兵庫縣　前川　泰象

いさをしもなき身を病みてかへりゆく故里近しバスにゆれつつ

北海道　石　川　章

大君の爲に死なめと出で征きしこの身甲斐なく病みこやるかな

東京市　梓　鞆子

戰へる海をし想ふ野を想ふ蟲の音しげき小夜中にして

北海道　松　山　正

大いなる南の戰果はせよりて告げんとすれば魂すでに去る

東京市　平野　治雄

今日よりは悲しみに耐へ寂しさにたへて誠の道を生きまし

北海道　嵐　浪　靖

御下賜の菊の香高き今日の日に友は再起の門出しにけり

秋田市　小崎　蓮葉

ますらをに我れ哭きにけり南海に敵の艦うちしづめけり

東京　鈴木　修吉

少年の夢を育くみたまひたる大きし師の君神去りにけり（偉北原白秋先生）

北海道　平井　正念

亡き妻の志うけ闘まんと思へど足らず今日も暮れけり

**投稿規定**

はがきに一回二首以内とし「淨土」編輯部歌壇係あて住所氏名明記の上送ること

# 實話 霊の堂守（中）

貴族院書記官　石橋德作

四方八方に顔向けが出來なくなつた不良兒高橋俊一が、毒をのんでもなほ死に切れず、地獄の劫火に責め苛まれ鬼どもの戈先に追ひつめられて病院のベットの上に轉々と苦しんでゐながら、

「死に損つたので、地獄へも行き損つたわけですね。アハハ……」

と、私に向つて冷然と大笑したそのうつろな聲に、私は思はずブルブルと震へてしまつた。何うしたらこの青年の心をほぐしてやれるであらうか。私は生きたとも死んだともはつきり判らぬやうな俊一の形相をみつめながら、話の糸口を探した。その時フト私の頭に矢張り不良兒であつたクライブの傳記が浮んできた。それはマコーレーの著したクライブ傳の一節である。私は俊一に對する反撥心で腹の中が煮へくりかへるのを無理に押へながら低い聲でこう談り始めた。

クライブの少年時代は何うにもならぬ不良兒であつた。手を燒いてしまつた彼の父は、彼を英國から追放するつもりで彼を印度へやつてしまつた。父が馴れぬ土地で熱病にでも罹つて死んでくれたら……と彼の父は思つたのかも知れなかつた。やがてクライブは印度に着いて父から貰つた幾つかの紹介狀を持つて宛名の人々を訪ね廻つたが、或る人は轉任し、或る人はすでに死し一人として賴れる者がゐなかつた。その内に路用の金を費ひ果してしまつた彼は、見知らぬ國で右にも左にも動けなくなつてしまつた。彼は夕暮近い樹の下で絶望のどん底に腹わたを斷ち、遂に自殺をしようと心にきめた。

ピストルを顳顬にあてゝ引金を引いた。引金はカチリと鳴つたが發火しなかつた。夢中になつて又引いた。しかし二發目も出なかつた。彼はピストルが故障したと思つて銃口を天に向けて引金を引いた。すると轟然たる音響とともに彈が出た。クライブは思はずピストルを大地にたたきつけて嘆いた。「肉親の父にさへ見棄てられたこの身が、神は未だ死なせ給はぬ」と、彼は大聲あげて泣き伏してしまつた。それから後のクライブは自分がこの世に生きてゐるのは神樣の御旨であるから何か大事業をしなくてはと、努力奮鬪し種々な困難を乘り越して遂に印度總督にまでなつた

「私は君を羨しいと思ひますよ。自殺しようと思つて毒を服み、そして死なずにゐるのは神様や佛様が君の死ぬのを許して下さらなかつたのだからね。君はまだこの世に生き殘つてやり遂げなくてはならぬ仕事がある證據だよ。また一度死んだと思へばこれから先きは佛様からあづかつた身體と考へられるので、君の境遇が羨しいと思ふね。一つ私にだまされたと思つてお念佛を申しなさい。信心のある人でなければほんとの仕事は出來ません。一所懸命にお念佛を申しなさい」

俊一は石のやうに固くなつて一心に聽いて

摩訶般若波羅蜜多心經

觀自在菩薩行深般若波羅蜜多時照見五蘊皆空度一切苦厄舍利子色不異空空不異色色卽是空空卽是色受想行識亦復如是舍利子是諸法空相不生不滅不垢不淨不增不減是故空中無色無受想行識無眼耳鼻舌身意無色聲香味觸法無眼界乃至無意識界無無明亦無無明盡乃至無老死亦無老死盡無苦集滅道無智亦無得以無所得故菩提薩埵依般若波羅蜜多故心無罣礙無罣礙故無有恐怖遠離一切顚倒夢想究竟涅槃三世諸佛依般若波羅蜜多故得阿耨多羅三藐三菩提故知般若波羅蜜多是大神呪

みる樣子であつた。上を向いてゐる彼の顏は、私の苦心ぐらゐではほぐれさうにないものを感じさせられた。

それから三日ばかり經つて、俊一の祖母であるキョさんが私を訪ねてきて、

「孫はこの頃大部樣子が變つてきました。それにお念佛を申してゐるやうです。今日なども何か信仰書が欲しいと云つてゐたところをみても何うやら信心が出たらしくも思ひます實は故郷の方に少々急な用事が出來て歸らねばなりませんので、病院には看護する者がなくなります。重ね〳〵で恐縮ですが、若しお氣が向いたら病院にもおいで願ひたいので若し時々にでも見廻つて頂けたらほんとに私も幸せなのですが……」

といふことであつた。あの俊一が私の話位でさう簡單にすぐ信仰心に目覺めたといふのも當にならぬと思はれたが、お念佛を申してゐるといふことは嘘ではあるまいと思つた。私はその內に訪ねるとキョさんに約束をした。

丁度その頃のこと、目黑に住む十六歲の女學生が大岡山の踏切で、電車に刎ねとばされて卽死した事故があつたので、私はいつもの例でその遺族の方々を慰問に行つた。その歸途ある古本屋で「現代觀世音靈驗記」といふ本を買つて歸つた。そしてその翌朝增上寺晨朝會がすんでから、役所にゆくには時間が早すぎるので大殿わきの觀音さまの所に腰を下し、靈驗記を讀み始めた。その本には觀音さまの有難いことが實例でいろ〳〵書いてあり、時間の經つのも知らずに讀破してしまつた。同じその日に私は役所からの歸りがけに、ふと俊一を訪ねる氣になり、病院に寄つて「現代觀世音靈驗記」を彼に貸してやつた

それから二、三日經つて私は病院に俊一を訪ねた。先日の陰慘な印象を忘れられずにゐた私にとつて、なんとなく氣分が明るく朗か

（四版は俊一の筆蹟——寫經の一部）

になつてきたとすぐに感じた。彼のいふには、私からお念佛を勸められてから日課五千遍の念佛を申してゐるとのことであつた。そして胃を藥で洗ふ時にはとても苦しいので我慢かなりかねることもあるが、そんな時には看護婦に待つてもらつてお念佛を申すのださうである。彼は身體が段々快くなつてゆくのもお念佛のおかげと感謝してゐた。私は病院から歸る際に貸しておいた例の靈驗記を彼に與へた。すると彼はベットの上に端然と起き直つて、「先生、有り難うございました。實は何んとかこのご本を讓つて頂けないものかと考へてゐたところでした」と喜ぶので、私は更に簡單なお經本を送つてやると約束したのであつた。

それからしばらく私も用務に追はれて、俊一を見舞ふことが出來なかつたが、一ヶ月ばかり經つたある日のこと私は病院に寄つてみた。私はその日病室に一歩入るや、びつくりして彼の顏を見直した。何んといふ不思議であらう。あれほど險惡だつた彼の顏がまるで別人のやうに穏かに生々と輝いてゐるのであつた。彼は私のゆくのを待ちかまへてゐたやうであつた。彼は私にいろ〳〵と禮を述べてから、こんな質問をした。

「この本の心經に五蘊は皆空であつて、老死もなく苦もないといふ文字がありますが、この文字の意味を教へて下さい」

いきなりこんな質問を受けて私に答へられる道理がなかつた。私はこういつた。この心經の一つ一つの文字についてさへ、十分に會得するためには昔から今まで高僧知識といはれる人達が何の位苦勞し修業してきたかわからないのである。それを僅か本を少し讀んだからといつてすぐこれが判るわけがないのだ。それよりも何時も觀音さまを信じ、身をおまかせしてゐればよいのである。身體は自分のものでほんとは自分のものでない。一切を觀音さまにおまかせすれば、そこには苦がないとこう考へてゐて間違はないであらう。しかしかゝることは云ふべくして仲々すぐに出來るものでないし、まして悟る等は到底急にわかるものではない。すると彼は云つた。

「あまりの嬉しさに、つひ短兵急に考へまして申し譯ありません。これからはお念佛のほかに南無觀世音菩薩と日課一萬遍を申すことといたします。」

おかげ樣ですつかり快くなりましたので、明日にでも退院したい心算です」

「それは結構、もう大丈夫であらう。しかしお祖母さんも故郷に行つてゐることであるから、もう少し待ちなさい。私からお祖母さんにさう云つて、すぐ來て頂こう」

十日ほど經つた頃、私が役所から歸るとキヨさんが私を待つてゐた。そして私の顏をみるや否やいよ〳〵俊一が明日退院することになつたと、お禮やら喜びやら、次々に談るのであつた。そしてこんな話を聞かせてくれた。

「私共の親類の一人で、只今は某省の技師をしてゐる工學博士がゐます。それが大學を出て洋行することになり、何うしても旅費が足らないからと泣きついて來ましたので、千圓ほど用立てゝやりました。洋行から歸つて博

士になつて、とん／＼拍子に出世しても、お金を返さうとはしません。こちらでも別に入用な金でもないので催促もせず抛つておきました。ところが今度、孫の自殺騒ぎで、急にお金が要るものですから、その博士のところへたのんで用立てゝ貰ひたいと申込みましたところ、劍もホロロの挨拶で一文も返してくれません。あまりのことに今朝も孫にその話をして、先方がそんな調子ならこちらも裁判しても千圓を取り戻してやらうねと申しました。すると孫は笑ひながらこういふのです。

『お祖母さん、あなたも信心家に似合はないことを仰しやいますね。お金が間に合はないために私がこの病院に入院させて貰つたのでせう。そのおかげで私は魂まで救はれたではありませんか。あの博士は私を救つてくれる緣をつくつた人です。決して怨みに思つてはなりまんよ』これが以前であつたら、それこそ匕首でも摑んで博士の家に呶鳴り込む位はしかねない孫の口から出た言葉です。私は不良であつた孫から逆に説法されて、もう嬉しくて嬉しくて……私は孫さへそんな氣持なら、親類の人にどんなに冷淡にされても苦になりません。あの千圓の金などはビタ一文返して貰はなくても澤山です。二十何年ぶりかで孫を抱いて泣いてしまひました。

今日御相談に上りましたのは、實は孫が出家して僧になりたいと申してゐることなのです。勿論悪いことでありませんので故郷の方は私がなんとでも承知させますが、出家させるにしても何うしたら宜しいのか一向判りませんので教へて頂きたいと思ひまして……」

もとより私にしても何ういふ手續と方法によつて僧になれるのか判る筈がなかつた。しかしただならぬ因緣を感じてゐた私は、とに角俊一の身體を當分預つてみようと約束した。赤羽にゐる知人にたのんで一間をかり、退院した俊一の宿とした。そこから毎朝私と同じやうに、增上寺の晨朝會に日參させた。なほ癒え切らぬ病後の彼にとつて毎朝四時にお詣りすることは並々ならぬ苦行であつたに違ひない。

彼が阿彌陀佛の前に禮拜する時の、恭々しい神妙な態度を後からちつと見てゐると、私はどんなに泣くまいと怺へてゐても涙がにじみ出て仕方がなかつた。ほんとに心の底から罪を悔いた人が、大慈大悲のみ佛の前に額いてひたすら許しを乞ふ敬虔さが、その前身を知つてゐるだけに私の胸を強く打つた。彼こそほんとの御佛の子だと私は感じた。それまでの私の信仰が何んだか非常に淺いもののやうに考へられて恥しいやうな氣さへした。

このやうにして朝の勤行を終えると、彼は大殿わきの觀音さまをお詣りした。御禮詣りのつもりなのであらう。壇に入れた水とお菓子とを家から用意してきて、觀音さまにそれを供へ觀音經をあげてゐた。彼が毒を服む前までに行つてきたいろ／＼な出來ごとに對して悔ゆる心が深ければ深い程、今まさに出新發しようとする彼の心は希望に張り切つてゐたに相違ない。しかし俊一の生涯にとつてこの僅かな數日こそ最も幸福な時であつたとは誰も知らなかつたのであつた。（文責在記者）

# 信仰相談

擔當　中村辨康（質問歓迎）

## 佛のたゝりがあるか

（問）一、私方の準親族の中に其家の死者に對して佛事に多少の不行屆きあるやに存じ、私方の過去帳に其戒名を記入し命日に聊か供物を供へ祭事を行ひ居りましたが、或人の言ふやう「他家の佛を祀る時は兎角一家に不祥事が絶へないから斷然廢すべし」とのことで、廢止して居りますが、偶々病者があるので夫れが爲ならむかと、神經をなやまして居ります。事實其樣な因果があるものでせうか。

二、私は我家の法要を勤める際に、私方より出たものや、常に祭事の行屆ない準親族の死者の副施餓鬼をして弔つて居りますが「それも宜敷事ならず云々」と云はれました。もし左樣とすれば無緣有緣とも他家の人となつた死者には一切たゝさはるのは反つて、不祥事を招く因となるわけですが、この疑惑を解消出來るやう御教示願上げます。（京都・寺町・二條・市點林）

（答）人情の上から言つても靈を慰めて貰つたなら御禮をなすべきに逆にそれにたゝりをなすと云ふことの有り得べからざることは極めて明諒なことであります。若したゝりをなすならばそれはむしろ惡魔的なものであつて、誠に「恩知らず」な靈と言はねばなりません。無論「靈」などとあがめるだけの價値もないのですが、そんな筈はあり得ません。誰がそんなくだらないことを言つたか知りませんが、それは人をまどはすものであつて、一切の靈はその人をこそ罰しなくてはなりません。このやうな徒らに人を惑はし道義をみだす者は天人共に許しては置けないと思ひます

若しさうならば「施餓鬼」などと云ふことは誠に不都合なことです。昔し德川時代に淺間山が噴火して死傷者が出來、京都に大火があつて人死が出來たので、德川幕府ではその冥福をいのる爲に本所回向院及び小岳川仲臺院に命じて大施餓鬼會を施行せしめました。これは一つの社會的精神慰安の役目をなすものなのです。然るにもし有緣無緣を弔ふことがわるいならば、靖國神社にも御詣りが出來なくなるわけですし、お祭りすることさへも出來ない譯です。宮司だから、或は國神だからと差別さるべきではないでせう。

## 人魂、精靈祭、追善など

（問）信仰相談ありがたく拜見させて頂いて居ります。御多用中寔に相すみませんが左記御教へ願上げます。

一、人魂を見たと云ふ人がありますが、あ

れは何でせうか。

二、お盆には亡くなつた精靈が打揃つて歸つて來ると言ひますが、それは迷つて居る人の靈だけのやうに思はれます。如何でせうか。我が國風の祖先崇拜との結付きをお話し下さい。

三、新亡の中陰中にお盆が來たときは棚經をあげて頂かない方がよいと言ふ人もありますが、それは何う言ふ意味ですか。

四、追善回向の意味とその功德に就いてお聞かせ下さい。（東京・下谷・スエ生）

（答）

人魂の話はむかしから、一つの迷信見たやうに言はれて居りますが、見たと云つても非常にあいまいで確實性がありません。大體幻覺に近いもので大勢同時に見たと云ふ例は殆んどないやうです。或は燐火であると云ふ話もありますが、どう言ふものでせうか。あてにはなりません。

お盆には御精靈樣が來るとむかしから申しますが、それはお盆でなくても「おがむ」ところには何時も來るのです。靈を物的存在の如く考へて居る人には「さう云ふことは有り得ない」と思ふかも知れませんが、それはその人の考へが間違つて居るからです。靈を物的存在の如く考へてはいけないのです。迷つて居る居ないの差に依つて來る來ないがあるのではなく、おまつりすることの有る無しに依つて來る來ないがきまるのです。

次ぎにお盆の風習と我が國の祖先崇拜との關係ですが、之れはもう度々言つて居ることで、少し何うかと思ひますが、お盆は我が國獨特のもので他國には見られません。日本古來の農祭と魂祭（七月と十二月と二回行はれたのです）とが、支那の三元の中の中元と、佛教の盂蘭盆會と、この三國の風習が一諸になつてお盆と云ふ先祖祭になつたのです。

またお盆の時、中陰中の方があつても棚經はあげてよろしいでせう。あげない方がよいと云ふことは存じません。そんな風習が何處かにあるのでせうか。棚經は宗門あらために起因するものださうですから、新亡のあつた場合はその必要がなかつたから或は略することにしたのかも知れませんね。

次に追善回向のことももう度々のことで、お答へするのもあきてしまひましたが、追善することそのことがよいことであり、それがそのまゝ功德でもあります。功德を物的に考へてはいけません。佛教では物的に考へることを「三有」と云つて、欲と物と心との三を物的存在の如く思ひ込んで居ることが「迷」であり、之れを否定せんとすると「無」の觀念に陷りますが、それもまた間違ひであるとして居ります。この「有」の考へと、その反對の「無」の考へとは共に斷見であり邊見であつて佛教ではこの邊見斷見の否定に苦心し鍊行するのであります。ことに淨土教では自分の功德を認めやうとするのではなく、如來樣の功德をこちらへ頂くのであります。即ち追善回向の形に於いて如來樣の功德を頂いて居るのであります。お分りになりますでせう

## 業障消滅は不可能か

（問）

—信仰相談—

義導大師の發願文に「入十方界救攝苦衆生」とあり、往生淨土即裁斷輪廻、從つて眞如同體、法界分身なれど因果の鐵則不動なれば積集せる業力は消滅せず。かくてはまた自由救濟は不可能と存候これ等を明快に致し度候（荏原・二葉・三五〇七・上島喜一郎）

（答）

因果は竪の關係だけを見るもの横の關係を顧みませんから、簡單で分りやすいけれども理論としては不完全であつて鐵則とは申されません。ですから因果は假設であると言はれて居ます。また宗教上の信仰の如きは因果律を採用しては居りません。道德として兼用して居るだけです。例へば因果の法則に從へば「自因他果」「小因大果」「惡因善果」「無因有果」等は絶對に許るされませんから、凡夫が報土に往生するなどは以ての外のことになります。だから天台座主になつた位の顯眞法師でさへも淨土の信が分らなかつたので大原談義と云ふやうな事實も起つたわけです。聖道門に依れば眞如同體であつて「悟故十方空」ですから、悟れば見思裁斷業力伏滅でせうが、迷へる者に取つては執着が破れませんから何處までも「三界城」からの離脱は出來ないとして居るのです。

然しながら宇宙の實相は謂ゆる「緣起」であつて一緣來り一緣去りつゝ常に進化して居るのであります。この緣起の理に從へば惡因であつても必ずしも惡果とならず善果を得られます。つまり強い善緣が加へられる時、善果を得られるのです。例へば惡い種子でも肥料勞力等の善緣が加へられゝばよい收穫を得られますし、良い種子でも肥料不足とか天候不良とかの惡緣が加へられゝば惡い結果となるやうなものです。念佛往生は如來の三力增上緣力が加へられるので、業力は問題にならなくなるのです。例へば如何なる重い大石でも船にのせて運べば大海に沈まずに彼岸へ渡すことが出來るやうなものです。ちつとも疑ひをさしはさむ餘地はないと思ひます。

## 有見無見共に謬見なり

（問）

阿彌陀經の中にある極樂の樓閣は澤山な大工や左官を使役して造り上げたものか、又は如來の德に依つて自然に出來上つたものか、極樂の種鳥が「法音宣流の爲に變化して所作された」と同じやうに如來の變化であつて有形物ではないのか、若し有形物とすれば淨土への往生人がふえるに隨つて增築せねばならないと思ひます。或時

の説教に「如來は變化自在大妖怪物である。極樂には形のある建築物は無く必要に應じて形をあらはして見せるのだ」との事をきゝましたが、椎尾博士の御話にも之れに似た事があつたやうに思ひます。また眞繼雲山氏の死生考に「有相の衆生が極樂淨土に往きつくと同時に更に佛力に依つて即時に無相の見に轉じさせて貰ふのである。さて無相の見に轉じて見るとあたりを見廻しても何にもない」とこれ等の説は間違ひありませんか。御教示を願ひます。（福井市吉野上町五四池田松平）

## （答）

仰せの通り淨土の一切の施設は「法音をして宣流せしめんと欲して變化して作したまふところ」であつて、別に大工や左官を頼むわけでもなく增築するわけもありません。隨つて御質ねの要點は物質的存在觀の上に立つか立たないかに依つて解釋が違つて來ます。淨土は決して存在即ちあ、る世界として考へずに無量壽即ち永遠にいきる世界としてのみ考ふべきであります。このからだが生きることを考へてもわかるやうに、このからだは固定的存在ではなくして常に進化止むことなき時間的推移であります。元來は物的存在にしても存在らしく見へて居るだけであつて、本當は推移し變化し行く速度が緩慢なのであり、緩慢な爲に固定されて居るものの如く見へるに過ぎないのであります。どなたの御説教か知りませんが「大怪物」などと冗談にせよ言ふところにその人の存在觀のまだ破れて居ないことを證明するものです。椎尾博士にそんな話がある筈がありません。貴君の考へ違ひでせう。また眞繼雲山と云ふ人は何う云ふ人か知りませんが、その説があなたの言ふ通りとして、有相が無相に轉ずるとするところまではまづ〳〵結構ですが、無相の見に住するものがどうしてあたりを見廻す氣を起し得ませうか。あたりを見廻すことは既に有相の見、有我見であつて矛盾も甚だしいと申すべきです。

極樂の依報正報共に有無の二見を離れて見るべきです。有見はもとより「無相の見」もいけないと思ひます。無見は有見の反對であつて有無對立の上に立つて居ては何時までたつても解決はつきません。有相無相どちらでもそれは實相の外形を論ずるだけです。外形は何れともあれ、實相の事實は「いきる」ことにあります。時間的推移にあるのです。例へば川の實相は水の一粒〳〵々々の集合ではなくして順々に流れて止まるところのない（固定して居ない）ところにあるのですから、その流動するところ即ち「いのち」の實相に眼をつけて「ある」と云ふ考へから超脱してしまはねばなりません。その考へ以外には人間に諒解は出來ないのです。だから昔の人達が有とか無とかを論じても結局論ずる人自身が判つて居ない。理窟はこねても盲人が象を撫て居るやうなもので譯がわからなかつたのです。隨つてあなたの御質問も有無二見の中の疑問であつて解決はつきません。之は支那佛教の大なる弊害であり戯説であつたのです。

**自局の熊**　かつぢ

「熊のやつ穐の字を讀んだかな自發的に出て來やがつた體あたりだよ」

**吊出し**

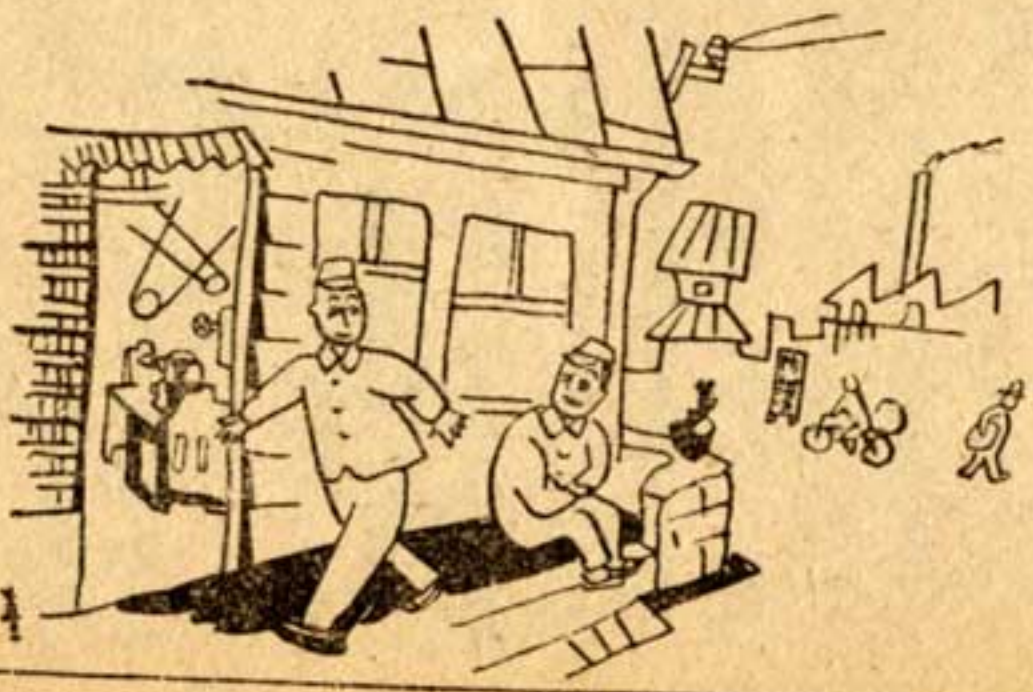
「おぢいさん僕持ちますヨ」

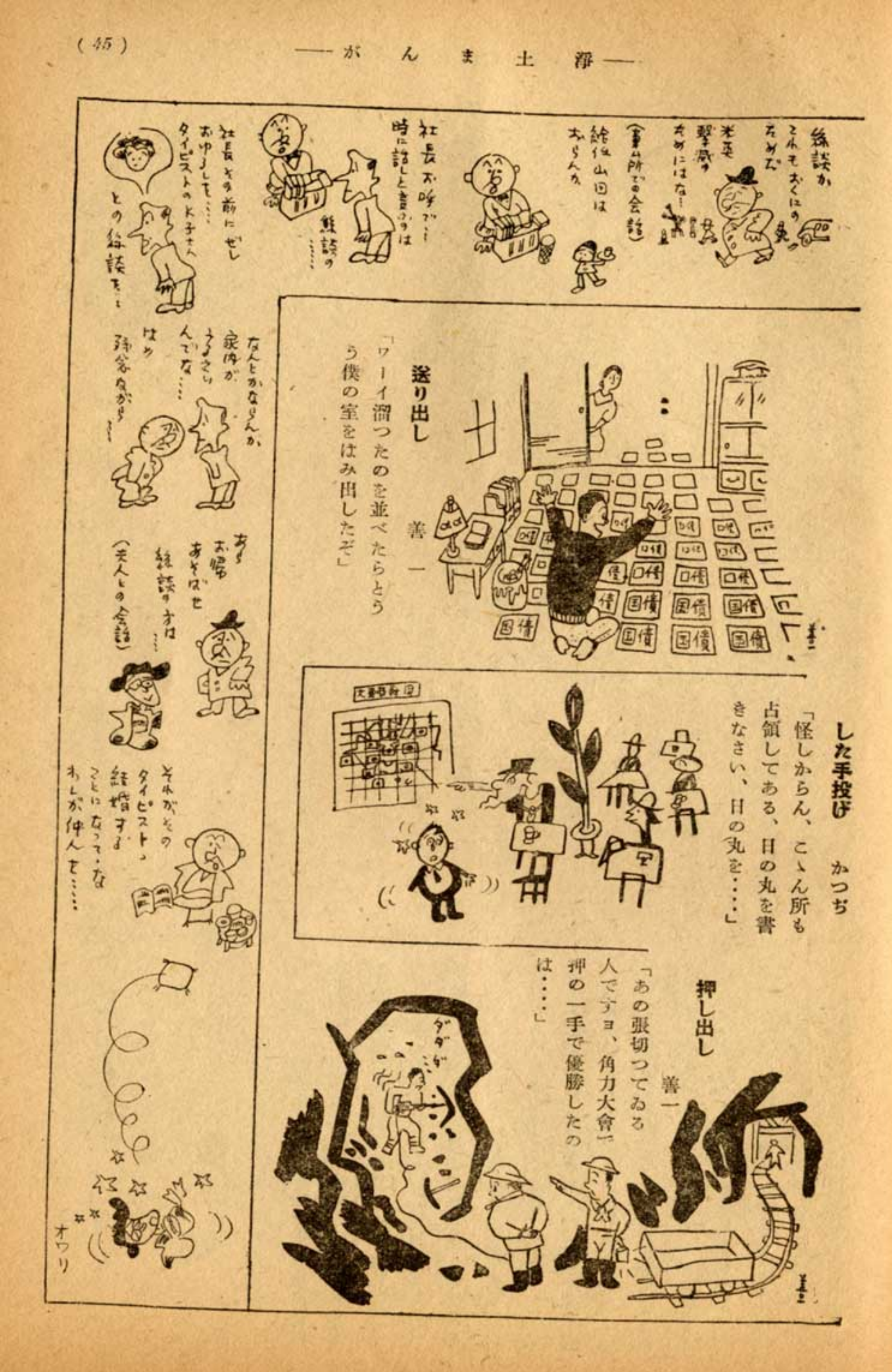
「何んぢやこんなもの、持てんで米英撃滅出來るかい、のいた〳〵」

**うつちやり**　善一

「今度すばらしい飛行機が日本に發明されたんだつてサ」

「そんなことより時間だ、仕事々々」




絲談か
これもおくにのためだ
米英撃滅のためにはな！
（事務所での会話）
給仕山田はおらんか
社長お呼び…時に話しと言ふのは
無駄の……
社長その前にぜひおゆるしを……タイピストのK子さんとの絲談を……
友人とかなんか
彼女が
うるさい人でな……
はゝ
弱ったな
（夫人との会話）
お帰
あそばせ
絲談ずは……
それがそのタイピストと結婚することになってな
わしが仲人を……
オワリ
送り出し
善一
「ワーイ溜つたのを並べたらとうう僕の室をはみ出したぞ」
した手投げ
かつぢ
「怪しからん、こゝん所も占領してある、日の丸を書きなさい、日の丸を……」
押し出し
善一
「あの張切つてゐる人ですヨ、角力大會で押の一手で優勝したのは……」
ダダダ

童話

# 青い小鳥ときかん坊

小川金英

今丁度日曜教園が終へたと見えて男の子や女の子が一かたまりになつて人をかきのけたりしてご門の内から次々に出て來ました。その中に何やらうれしそうにしきりに話し合ひながら出て來た四五人連れの女の子がありました。と一人が、

『あらッきかん坊竹が、あれあそこの角に立つてこつちを見てゐるわ。どうしませう？』

つて叫びました。女の子等は急にうろ〳〵してわき道からバタ〳〵かけ出しました。角の電柱の蔭にかくれてゐた竹坊はこの様子を見ると直ぐ追つかけて、女の子等をさんざんいぢめて泣かしました。

『泣き虫、泣き虫やアーい』つて竹坊はそのまゝ一目散ににげ出しました。

竹坊はほんとうに悪い子でした。なまけ者で強情者でした。していつも同じ位の子供達を泣かしては喜んでました。そんな風ですから近所の人からはきらはれお友達からは仲間はづれにされ、學校では先生にいつもお叱りを受けてました。竹坊のまわりは皆敵ばかりでした。けれど只一人竹坊をほんとうに心から可愛がつて案じて下さるお方がありました。それは竹坊のお母さんでした。お母さんは四年前にお父さんが亡くなつてから、一人つ子の竹坊を随分とご難儀しながらよい子に育つ様にと苦勞なすつた事でせう。そんなに可愛がつて下さるこの世の中で只一人の味方であるお母さんの云ふ事さえ、すなほに聞くことの無い竹坊でした。こんな子でも學校で成績が良かつたり、良い事をして先生におほめをいたゞいたり、お友達から親切に大事にされたりしてゐる人を見ると、羨やましい心がするのでした。『自分もあんなに皆から大事にされたいナア』と思ふのでした。今日も朝禮の時に校長先生から牛乳配達をしてゐる親孝行者の弘ちやんが、お友達と一緒に出征兵のお家に手傳つた事で、おほめをいたゞいたのでした。竹坊はだまつて聞いてましたが、

『そうだいつか先生が仰つしやつたつけ、どんな悪い者でも心さえ改めて行けば、き

つと良い子になれる。そして皆んなと仲良くなれるつて。そうだもうこれからはきつといたずらや、らんぼうはしまい。そしてよい子にならう！』

かう心に思ふのでした。だが又、『きかん坊竹』なんと云はれると直ぐカーッとなつていぢめたくなつて、追つかけたり、とうせんぼしたりなどして泣かしてしまうのでした。そしては又お家に歸つて可愛がつて下さるお母さんにまでおだゞをこねてしまふのでした。

『お母さんよ——アンアンア——ン』

大きく口を開いて竹坊はお母さんにおだゝをはじめてました。

『竹坊や！　そんなに我儘を云ふものではありませんよ。ネいゝ子だからネ』

『馬鹿馬鹿！　馬鹿おつ母ア』

とそばにあつた物尺でいきなりお母さんを打つて逃げ出しました。お母さんは打たれた痛さも忘れて逃げて行く竹坊の後姿を見ながら、獨り言を云ひました。

『竹坊や、ほんとに欲しいのだら

# 地獄はあるか

（故岩井智海猊下が或る日のこと來訪者に對して次の如くお話をされたことがある。）

死んだ後に地獄、極樂があるかといふのは明日があるか、ないかといふのと同じで明日になつてみれば解る話である。「地獄なしといふ人に地獄あり、地獄ありといふ人に地獄なし」であつて至極簡單な問題である。

例へば刑務所にしたつて同じで、刑務所などはないと眼中におかないで無茶をやる人は刑務所に入ることゝなる。人間惡いことをすれば刑務所が待つてゐるといふ人には殆んど刑務所の用がない。刑務所に入つて國家の御厄介になつてゐる人は、前もなければ後もないといふ刹那主義の人が多いやうである。

三世相といつて昨日と今日と明日、前と今と後との三つを考へてゐる人には惡いことが出來るものでない。現在が地獄へ行くやうな行爲をしてゐればきつと地獄にゆくし、現在が極樂へ行くやうな行爲をしてゐる人はきつ

う。隣の良ちやんのを見たら！　竹坊にだつてお父さんさえ生きてゐて下すつたらなんで自轉車位買つて上げられぬこともないんだに……』

お母さんの聲はおろ〳〵聲になつて來て目に一つぱい涙が浮んでました。

そんなことはちつとも知らない竹坊は思ひのまゝにならなかつた心持を、小鳥取りに向けました。けれども今日はどこを尋ねてもうまく取れませんでした。どこかで閑古鳥が鳴く聲のみ靜かな林に響いてました。じれつたくなつて來た竹坊は大きな聲で、

『馬鹿ア——』と只叫んで見ました。この時そばの小松の下から小さな羽ばたきをして飛び立つた小鳥がありました。竹坊のとん狂な聲に驚いたのでせう。

『これはきつとこの邊に鳥の巣があるんだナ』竹坊はそう思つて尋ねました。

『あッある、ある、』

木の枝と枝の間にやはらかな草や鳥の羽毛で造られた丸い巣の中に青い色した卵が四つ入つてました。早速手に取つて見ると溫くなつてました。たしか親鳥がだつこしてゐたのでせう。

竹坊はもつて歸らうとしましたが、こんな事を考へました。

『卵なんかで取るより小鳥になつてから取つた方がいゝ。そうだ、そうとしよう、』

竹坊はこつそり又元の通り巣に入れて誰にも見つからぬ樣にして家へ歸りました。竹坊は家に歸つてもさつきの事を思つてました。

『若しか僕の行かぬ間に小鳥になつて飛んで行つてしまふじやあるまいか？』

翌る日も、こつそり行つて木の蔭で見てました。親鳥はやがて小鳥になる可愛い卵を青いお空を眺めながら抱つこしてました。翌る日も又翌る日も、毎日の樣に行つて見ました。丁度五日目、來て見たら親鳥はゐないで、丸い巣の中には卵からかへつた可愛い小鳥が四羽寄りそふて親鳥を待つてました。赤ん坊の小鳥は飛ぶことも出來ません。

『もうすこしたつて飛ぶ樣になつたら取る

---

と極樂へ行く。尤も地獄があるかないかといふよりも、地獄へ行くやうな人は現在の境遇がすでに地獄の生活をしてゐるのである。

ある時、小學校の校長が集つた會があつてその席上地獄の青鬼赤鬼は虎の皮の褌をしめてゐるが、なるほど熱帶地方には虎がゐるものの地獄にも虎がゐるのかと、赤鬼青鬼の戸籍調べみたいことを質ねられた。そこで地獄の繪はお釋迦さまのやうな所まで頭が進まねば解るまいと答へたら、こんどは人間に解らぬものを何故こさえたと逆襲してきた。そこでこう說明したものであつた。小さな幼稚園の子供に向つて「そんな惡いことをすると刑法何條によつて刑務所に行くぞ」といつても判らない。それよりも「惡いことをすれば藏へ入れるぞ」といへば、一番よく判る。ところが藏の中には家の大事なものが入つてゐる所であるが、それでさへ子供は恐ろしがる。丁度これと同じでお釋迦さま位になると地獄の繪がよく判る。

すると先生達は「今日は人智が進んできた

としよう』

竹坊はこう思つて、又毎日々々行つて見ました。卵の時まではじつと抱つこしてゐた親鳥は何處へ行つて見つけてくるのか、ご馳走をくはへて來ては小鳥を養つてゐました。毎日の樣に來て見てゐる中に、もうだん〳〵大きくなつて飛べる樣になつて來ました。

朝露のまだこぼれぬ頃でした。親鳥の唄につれて小鳥達が小枝から小枝へチョン〳〵飛んでゐました。丁度〃あんよは上手こゝまでおいで〃でもしてゐるやうに。こんな樣子を見てゐる中にあんなきかん坊だつた竹坊も小鳥達になつかしみが出て來て何んとなしに可愛想になつて來て小鳥を取つて歸る氣になれなくなりました。そして毎日餌を尋ね廻つてゐる親鳥がどんなに難儀な事だらうと思はれて來ました。そして竹坊は時々自分のお辯當からすこしづゝごはんをその邊にちらしてやつたりするのでした。或る時はお母さんが親切にこしらへて下すつたおかずの玉子燒まで分けてやるのでした。そして小鳥達が喜んで食べる樣

から、あんなものより外にもつと書きやうがあらう。あれは嘘の繪だらう」といつた。丁度そこに繪畫教育に用ひる象の繪があつた。

「先生あれは何の繪ですか」「象です」「この象は何處の國で何年に生れて、現在誰の持物で、目方は幾ら、丈は……」とたづねたら

「そんなわけのものではない。ただ象といふものは大體こんな風なものだといふことを書いたものです」

「それぢや嘘の繪ですね。本當の象なら何處の國で何年生れ、目方は幾ら、背の高さはこれだけ、現在の持主は誰といふことが書いてあるべきです」

「さうぢやない。これで教へておけば、子供に象といふものの知識が出來て、動物園へ行つても、はゝア、これが象だなといふことがわかるのです」

「そこです。嘘の象の繪でも教へておけば、子供にはちやんと象といふものの知識が出來る。地獄の繪も、悪いことをすればこういふ苦しみの報いが來るといふことを示したもの

子を木影から眺めて、うれしそうに獨りほゝ笑んでました。

それはとてもよいお天氣の日曜の朝でした。日曜教園のお寺から鐘が靜に響いてました。この朝こそ小鳥達が日頃夢見てゐた青いお空をさして思ひのまゝ翼を延して飛び立つ喜びの日だつたのでした。今日か今日かと待つてゐた竹坊は、今日こそと、いつもの場所に來て見てました。丁度自分のお家から誰やらが兵隊さんにでも出征する樣な氣持で。

小鳥達は親鳥の唄につれて松の枝に止つて、何かしら皆んなで囀づるのでした。お別れの唄なのでせうか。竹坊へ今までのお禮でも云つてるのでせうか。竹坊には何んだかお禮を云つてでもゐる樣に思はれてこつそりおぢぎをしました。小鳥達は『さよならー』とでも云ふ樣に小首をかしげて鳴いてましたが、やがて元氣よく飛び立つて行きました。竹坊も飛んで行きたい樣な氣がして、思はず『おほ——い』

と呼んで見ましたが、もう青いお空に小鳥達の姿が見えなくなつてしまひました。獨り殘された松林の中に竹坊は、何んとも云はれないへんな心持ちになつて、うれしそうに飛んで行つたかなたの空を眺めてゐました。

いつもあの樣な小鳥の玉子を取つてこはしたり、又ひな鳥を巣から無理に取つて悲しげに鳴くのもかまはず、つひには羽毛などをむしつたりしてゐた竹坊としてこんな心持で小鳥を見てやつたのは初めてでありました。そしてこんなに喜んでお禮までされたのも竹坊が生れて初めての事なのでした。

竹坊はうれしい樣な恥かしい樣な氣が、胸一つぱいにひろがつて來て、誰かゞ見てはゐまいかと今更にあたりを見廻しました。

家へ歸つて宿題をしながらも小鳥の事を考へました。『あゝ今頃は小鳥達はどこを飛んであるいてるのだらう』と、お晝のご飯を食べてから又いつもの樣に巣に行つて見ました。

空つぽになつた小鳥の巣は寂しさうに冷たくなつてお空に中を見せてゐました。竹坊はいつまでも〳〵そこに立つて、飛び立つて行

---

である。

佛敎では貪瞋痴の三毒といふことをいふ。青鬼は人間の欲の相で、何んでも我がものとしたい貪りの相である。赤鬼は腹の立つた時で烈火の如く怒り狂つた相を現し、黑鬼は物の判らない愚痴の心の相を現したものである。だから地獄の繪をみつめてゐると、自分の貪瞋痴のすがたが鬼たち以上であると考へられ我ながらぞつとする。その繪が實に我が心の内をよく現してゐるので感服する。それを鬼の戸籍調べをしてゐるやうでは何時までたつても地獄の繪は判らない。」

近頃の人間の中には他人の眼や耳を恐れるものがある。人の見てゐない所、聞いてゐない所で一度蓋をあけて見ようものなら青鬼赤鬼がそのまゝでとび出してくるやうな人がある。加賀の千代女の句に「折かけて月に恥かし梅の花」といふのがある。かうなれば胡魔化したくても胡魔化せぬ。況んや神佛がみてゐるといふ宗教的な深い信仰があつたら、惡いことが出來よう筈がない。（終り）

く時の小鳥達の様子を思ひ浮べながら彼方の空を眺めてゐました。いつの間にか夕方になつてお日様は西の山の邊に來て木影からもれる夕日は、竹坊の影を長くうつしてゐました。急に氣付いたかの様に竹坊は歩み出しました。そして

『小鳥達は今僕の事をどんなに思つてゐるだらう、きつとうれしかつたらう！喜んでいつたらう！そして僕の事を親切な子と云つてるだらう、親切！　親切つて唯こればつかしの事で喜ばれるのかなア』

こんな事を思ひながらお家へ歸りました。お母さんは井戸で水を汲んでゐましたが、竹坊を見ると、

『竹坊！　お前今頃まで何處で遊んでゐたの？　こんなに暗くなるまで、きつと又けんくわでもして他家の叔父さんに叱られてでもゐたんでせう。さあー　早く入つてご飯にしなさい』と叱る様に申しました。

その晩竹坊はいつもより早く床につきました。だまつて目をつむつてゐると、今まで自分がした事が次々と思ひ出されて來ました。お母さんが病氣した時も一遍もお世話らしい事をして上げなかつた事、學校からご注意をいたゞいた時、お母さんが泣いてよく聞かしてくれてゐたのに知らん顏して、外を見て唱歌等を唄つたつけ、學校での事お友達にした事、それからそれへと一つ一つ思ひ出せば出す程自分ながらあんまりな事ばかりでした。

『僕のお母さんもあの小鳥のお母さんの様に心配してしかも難儀して僕を育てた事だらう。いま現にこんな僕なので人一倍心配して下すつてゐるだらう。お母さんの云ふ事をよく守つたらさぞお母さんも喜んで下さるだらう。して又先生や近所の人達も喜んで下さるんだらう。親切にすれば皆んなも又親切にしてくれるんだ。仲間はずれにもきつとならぬだらう。きかん坊竹、ともだちは誰も云はぬだらう。そして皆んなとたのしく遊べるんだ』

かう思つたら、うれしい様な樂しい様な氣がして來ました。目をあけて見るとお母さんは薄暗い電燈の下で賃仕事のお針を一生懸命してました。竹坊はなんだかすまない様な氣がして來て、枕から頭を上げて、

『お母さん！』と呼びかけました。

『何んですの、まだ眠らないの！』お母さんはお針の手をやめて竹坊の方を見ました。

『うんまだ眠らないの……お母さん、あんまり根つめて仕事をして病氣にでもなるといけないんですよ』

とまで云つたら、何んとなく涙が湧き出て來ました。お母さんはびつくりした様にして、ニッコリお笑ひになりました。竹坊が今夜にかぎつてこんなやさしい言葉を云ふのに驚いた事でせう。そして又どんなにうれしかつた事でせう！　竹坊はくるりと寢返りをして蒲團を頭からかむりました。そして、

『お母さんごめんなさい。これからいゝ子になりますから』

と心の中で云ひながら早く眠らうと目を閉ました。靜かなお室に時計の音のみがして夜は更けて行きました。

（野水昌子畫）

# 俳壇

## 太田耳動子選

東京　小山しづ

名月に御はだぬぎの佛たち

評　石を刻んで出來てゐる御佛かも知れない。それが冴ゆるばかりに明らかな名月のもとに、寒い位に並んでおられるので斯う表現したものと思はれる。中七字の表現並に見方が優れてゐる。

滿洲　鶴岡　戀禮

枯山をかみて砲車の登りゆく

評　草枯山に車輪を深く印し乍ら登つて行く砲車の重さが良く出てゐる。

香川　日向　法圓

菊活ける娘の薄化粧見たりけり

評　薄化粧といふ表現は多くの場合嫌味が伴ひがちであるが此の場合は成功してゐる。女子のつゝましやかな、たしなみと云ふ以外に菊活けることに對する敬虔な氣持が充分でてゐる。

今治　三木光子

コスモスや居ならび給ふ地藏尊

茨城　直木謙太郎

小春日にいびきをかきて小猫かな

高岡　内山禪芳

立山の嚴しく晴るゝ秋日かな

京都　近藤青牛

夜寒の灯蹴る石疊先斗町

滿洲　神田儀一

枯れ草の山あたゝかき憩かな

大阪　吉岡光雄

お十夜の子が集りて地藏堂

京都　拜鄕賢三

底冷えのさびしき京に來りけり

富山　佐伯光安

立山の雪の白根に月の影

兵庫　山本多可子

菊花壇蜂のひなたをつくりをり

三重　俵口隆成

山里は菊を暦の明治節

新宮　竹中八洲子

たそがるゝ人々稻架つくりをり

東京　清水金鈴子

さんま燒く煙りに淺間ふと思ふ

名古屋　福田眞吉

あくまでも山は眠れる師走かな

東京　山本竹泉

三猿の塚のほとりや落葉たく

名古屋　鶴田稱眞

風のもとにたほれし菊の盛りなる

京都　乾仁一

吾子の聲大きくあげぬ亥子獅子

東京　杉浦文治

稻刈の八王子街兵馬ゆく

大阪　原富子

南方の資源の地圖や壁の秋

青森　丸山傳山

草家より餅つく音やみのる秋

富山　佐伯禪祐

柿もぎの雀にのらせ四つ五つ

大阪　萬順雄

經の聲かそかなるあり山の秋

名古屋　熊澤秀國

栗三つ拾ひて朝の散歩かな

富山　新田愛染

コスモスの花挿してあるバスと見し

東京　江崎孝融

加行にも素足に通す寒さかな

大阪　三木繁雄

秋の山そばたつ影も澄みにけり

兵庫　矢場天橋

合掌す老の靜かに夕燒くる

北海道　柏谷利吉

讀みてゐる雜誌ねむたき長夜かな

廣島　山口勇治

菊おいてお召しの鐘の寫眞とる

北海道　花田順往

戰勝の新年にして意氣あがる

岐阜　立木眞激

師のかげをあきらかにして秋の月

横濱　井上盛作

大地圖の夜長や職場座談會

香川　山上應譽

聖典を繙く夜半の虫の聲

兵庫　水谷良子

月明のとり殘されし柿を見る

奈良　五葉念香

遺族隊降りきて驛の爽かに

京都　福島孝治郎

征ける子は何處にゐるや月の秋

**投稿規定**

官製はがき一回二句以内とし、住所氏名明記の上「淨土」編輯部俳壇係あてに送ること。

法語解説

# 日本人なればこそ

## ……よくわかる信仰の氣持……

中村辨康

### 法語

我は烏帽子もきぬ法然房なり。黒白をも知らざる童子の如く是非も知らざる無智の者なり。たゞ念佛往生を仰いで信ず。釋迦は念佛して往生せよとすゝめ、彌陀は念佛せよ來迎せんと仰せられたり。此の一事を信じて餘事を知らず。（西宗要）

念佛には甚深の義といふことなし。念佛申すものは必ず往生すと知るばかりなり。（勅傳第二十）

念佛申すには全く別の樣なし。たゞ申せば極樂へむまると知りて心をいたして申せばまいるなり。（念佛問答集）

念佛の機はたゞ生れつきのまゝにて念佛をば申すなり。智者は智者にて申して生れ、愚者は愚者にて申して生る。道心ある人も申して生れ、道心なき人も申して生る。乃至富貴のものも、貧賤のものも、慈悲あるものも、慈悲なきものも、欲ふかきものも、腹あしきものも、本願の不思議にて念佛だにも申せば何れもみな往生するなり。念佛の一願に萬機を納めて起し給へる本願なり。たゞこざかしく機の沙汰をばせずして、懇ろに念佛だにも申せばみな悉く往生するなり。（勅傳第四十五）

（法語抄六一、六二、六三、六五）

### 解說

信仰と言ふものは、少しでも自分に思ひあがつた氣持があつてはいけないやうです。さもないと如何にばたついても入信の自覺を得られるものではありません。また多くの人は色々と信仰のことを聞き知り學び知らうとして居りますが、智と信とはおのづから性質が異つて居るのでありま

すから、外の言葉で申しますと聖道門と淨土門とをゴッチヤに考へて居るものであります。即ち聖道門は智恵を磨いて自分を完成しやうとするのですが、既に法然上人のやうに「智恵第一」と稱せられた御方でさへも

「もし智慧をもて生死を離るべくば源空なんぞ聖道門をすてゝこの淨土門に趣くべき（や）。まさに知るべし。聖道の修行は智恵をきはめて生死を離れ、淨土門の修行は愚痴にかへりて極樂に生ると」

と仰せられて居りまして、智恵を主眼としようとする氣持をすつかり捨てられたのであります。

嘗て日蓮宗の或る僧侶の方が、法然上人の

「我は烏帽子もきぬ法然房なり。黑白をも知らざる童子の如く是非をも知らざる無智の者なり」

と云ふ一節を拔き出して云ふやうには、

『當時「智恵第一」の稱を得て居たのであるから、法然上人自らにもさうした考へが全然なかつたとは言へない。然るを自ら黑白をも知らぬとか是非をも知らぬ無智のものとか言つて居るのは謂ゆる卑下慢であり、それを又有り難がつて居る末流の者の氣も知れないのである』

と云ふやうな意味のことを言つて居ましたが、これは「信」と云ふものの內容を知らないものの言葉でありまして全く取るに足らないのであります。然しこのやうに多く一般の人は「信」と「智」とを一緒にして考へて居るのでありまして、そこに色々の混線と疑惑と難澁とが出て來て本ものになれないのだと思ひます。

「たゞ仰いで信ず」

信仰はそれだけでよいのです。だからこそ「甚深の義と云ふことなし」であり「全く別の樣なし」であります。信仰とは讀んで字の通り「信じ仰ぐ」であつてその外の何物でもないのです。全く理窟ぢやありません。既に理窟ぢやないのです。然し信じ仰げるやうになり得るのはさん〳〵理窟をこねて見て遂に理窟に屈してしまつたからであります。さうなるまでには相當の苦勞があつた筈であります。さんざんもみにもんでもみ拔いた擧句なのであります。であればこそ徹底的に智慧をも捨て得るのであります。

これは謂ゆる「解」を求めて行つた人達の遂に行くところの徑路であります。例へば法然上人がすつかり聖道門を捨てられたのは畢竟「解」では駄目だと云ふことが徹底的におわかりになつたからであらうと思ひます。普通の人以上に徹底して學ばれた方であるだけに、一層徹底して「解」

を捨てられたのであります。

概念は何處まで行つても概念です。概念でわかつたと思つたとて實生活上では何も知らぬ人と大差がなく、やつぱり同じやうに色々なことに執着し、同じやうに迷妄顚倒の生活をして居るのでありますから、むしろ何も知らぬ人の方がまだ罪は淺いのであつて、その得た概念は生活的には何にもならないのです。だから「黑白も知らぬ童子」と同じであり「是非をもわきまへぬ無智のもの」と同じであるわけであります。イヤむしろ「黑白も知らず是非も知らぬ」ものの方が手取り早く「信」に入り得るのであります。

卑下ではありません。そんなけちな考へで眞實の信仰に入れるわけがありません。

「たゞ仰いで信ず」

それでよいのです。結局は玆に歸着するのです。されば「生れつきのまゝで念佛せよ」とすゝめられるのだと思ひます。決して「智者が愚者になれ」と云ふのではありません。また逆に「愚者は智者にならねばいけない」と云ふのでもありません。即ち智慧ある者がわざとらしく愚かの者のやうになるのではないのです。唯その「智」を頼みその「智」に依つて信仰を求めようとしなければよいのです

問題は如來様に南無し得るか否かにあるのです。理窟なしに如來に南無し得ることは、誠に容易いやうで居て、實際は容易でありません。むしろ「愚者」には容易でせうが、なまじ「智」ある人には容易ではないです。

道心ある人もまたさうです。俺ほどの道心なればと、自分の道心に憑む氣持があつては駄目であります。それでは本當の「南無」にはなれません。其他善人も、富みたる者も、位高き者も、慈悲ある人も、それ〴〵その特徴にたのむ心があつては駄目であります。

誠に如來様の前には智者も智者にならず、道心者も道心者にならず、富貴者も富貴者にならず、慈悲者も慈悲者にならず、皆な悉く仰いで信ずる人とならなければ本ものにはならないのです。

それは丁度太陽の前には星の光も月の光も電燈の光も提灯の光もみな悉く同じ微弱な光と化し去つてしまふのと同じであります。

凡ては「無量光」の中に融入つてしまふのです。凡ては「無量壽」の中に歸一されてしまふのであります。智者も愚者も差別はありません。道心者も無道心者もありません。富貴も貧賤もありません。慈悲善根者も無善根者もありま

せん。小欲の者も多欲の者もありません。善人も悪人もありません。一切は大本願力の中に攝取されて行くのです。

然しそれは本願力に隨順する者のみの歸結です。素直なもののみの「よろとび」です。

例へば井の中の蛙が釣瓶の中に入れられて引き上げられ、そして廣い世界へ出されるか否かは、釣瓶が引き上げられる力のまゝに素直に從順にして居るか否かで決せられるのであります。いくら廣い世界へ出してやらうとしても、自分の力を頼んで若しもピョンと飛びはねるならば、その蛙は再び元の井戸の中に逆戻りしてしまはねばなりませんやうに、或はまた素直に釣瓶の引き上げられるまゝに委せて居るならば、その蛙は必ず廣い世界に救ひ出されるでありませうやうに、私達の素直な隨順心が私達を信の世界へと導入して呉れるのであります。無論私達の力は問題ではありません。自分の無力さが認識されたのちの素直さが必要なのであります。

「生れつきのまゝ」と云ふことは、そこに何等自分自らの作略のない「赤ン坊」のやうな純情になつて居ることであります。第一線の軍人が疵付いた時よく「お母さん」と叫ぶさうでありますが、その子供らしい生れつきのまゝになつた氣持こそ、彈丸雨下の中を突進し得た純一な忠誠心たり得る氣持であります。

こざかしい理窟は絶對にいらないのです。自分がよいの悪いのとそんなつまらないことに何時までもこだはつて居ないで、唯ひたすらなる謙虚な氣持で、天地の如來力に一切をおまかせした、いと懇ろなる心でお念佛すること、それだけでよいのであります。

かう云つた純情の氣持は第一線に立たれて幾度か死線を超えた軍人の方々ならば最もよく分ると思ひます。理窟なしに自分の身命を捧げて「天皇陛下萬歳」を叫び得たその經驗は宗教の信仰心と似たものだからであります。イヤ銃後の者と雖もこの聖戰下に本當に此の身の偉大なる責任を痛感した時、日本人なればこそ此の身も心も御國の爲に捧げたい氣持になるのを實感しますでせう。かゝる氣持こそ、やがて淨土の信仰の「生れつきのまゝ」にて念佛申す氣持と均しいものではないでせうか。

日本人なればこそよくわかる氣持だと思ひます。

日本に生れた喜び！

日本にのみ現はれた淨土のみ教！

私達は此の一事をよくよく痛感すべきではないでせうか

# 編輯後記

◇わが國有史以來いまだかつてなかつた緊張と希望に輝く新春を迎へました。會員各位の一層の御自愛と御奮勵とを祈ります。

◇このよき年に生れ合せた幸せは御同慶の至りに存じます。どんな困苦がふりかゝらうとも、新しい世界を創るのだと思へば自ら張りが出てきます。

◇われわれはつひ自分の考へなり感じ方を以て他を推したがるものです。しかし世界を舞臺にしてゐるからには努めてこの癖を直さなくてはなりません。

◇例へば、敵の潜水艦がわが近海にきて營々と働いてゐた漁船を沈め、機銃で水中に泳ぐ漁師を射ち殺したと新聞が報じてゐます。この彼等の鬼畜に劣る行爲は皇軍の武士道の敵兵すら溺れるものを救つてやる氣持からはたうてい判らぬことであります。

◇何分にも彼等は昔濠洲で原住民を殺して廻ることを一種のスポーツであると放言したことのある民族です。

◇現に税關で彼等は檢査と稱しわが國の婦人を眞裸にして立たしておいたり、重症で動けぬ邦人を無理に拘引して死なせてゐます。

◇われわれは命のある限り斷じて勝ち拔くのであります。そのためにわれわれの毎日の生活から變へてゆかねばなりません。生活をきりつめてゐるやうでも、これがほんとの最低限度だとはいへません。

◇勝ち拔くための生活をたてるのに、信仰のある人とない人では大變違ひます。一粒の米でも一掬の水でも粗末に出來ないのが信仰のある人ですが、信仰のない人に唯大切にしろといつても仲々徹底しない所があります。

◇わが國の生活に何の位お念佛が入り込んでゐるか申すまでもありませんが、ますますその特色を發揮してゆきたいものと思ひます。

◇吉田絃二郎先生はますます御元氣です。本年も相變らず御指導下さらんことを願上げます。

◇久し振りに佐藤春夫先生から玉稿を頂きました。先生の熱烈な淨土信仰は默つてをられないのだといふものを感じます。

◇子母澤寛先生の玉稿「雜話雜記」は十月號所載の「雜史雜記」の續篇であります。

◇相馬黒光女史からの玉稿は手も樂に動かせぬ病床の上から頂きました。御厚情を深謝いたします。

◇石橋德作先生の「靈の堂守」は當方の不注意から先月號に誤植がありお詫びいたします。先月號所載の人名は何れも假名であります。

◇大野法道先生の聖典講義は御都合により一回休載いたしました。御諒承下さい。

（村瀬）


淨土　正月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和七年十二月二十日印刷納本
昭和十年一月一日發行
（定價十二錢）

東京市芝區芝公園十五號明照會館
編輯兼發行人　貫野正順

東京市芝區芝公園十五號明照會館
印刷人　赤尾光雄

東京市牛込區榎町七（東東一）
印刷所　大日本印刷株式會社

配給元
東京市神田區淡路町二ノ九
日本出版配給株式會社

發行所　法然上人鑽仰會
東京市芝區芝公園明照會館內
振替東京八二一一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價　金十二錢（送料一錢）

會費　金一圓五十錢（送料共）
一ヶ年

腦の病・神經系統諸症・神經痛
腦溢血・鼻・耳の病・不眠症

# 光明丸

綜合的優秀藥

主治効能

腦神經系統諸病、神經病、腦神經衰弱、不眠症
てんかん、腦膜炎、ヒステリー、小兒麻痺(ヒキツケ)腦
梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、(肩首コリ)
神經性(耳病)、神經性(鼻病)、記憶力減退、
思考力減退、精力減退、健忘症、性的神經病一
切、神經性變屁症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
胃腸障害、便秘症、神經痛、ロイマチス、關節
炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

藥價
六日分 貳圓
十日分 參圓
廿日分 五圓
卅日分 七圓

全國有名藥店、一流百貨店ニアリ
品切ノ節ハ直接本舗ヘ御注文下サイ

試供藥と説明書を 進呈

謹製頒藥元 京都伏見いなり山 願成閣

代理店 全國一流賣藥卸賣會社



昭和十年五月廿日第三種郵便物認可 (毎月一回一日發行)
昭和十七年十二月廿日印刷納本・昭和十八年一月一日發行

淨土 第九卷 第一號

(停) 定價金十二錢(送料共)
滿鮮臺等外地定價金十三錢